その少年はマサル

嶋　雄一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
その少年はマサル

【Ｎコード】
Ｎ１３８６Ｘ

【作者名】
嶋　雄一

【あらすじ】
中瀬将は空手の試合で失神ＫＯされ、その時から幽体離脱が出来るようになった。幽体離脱した意識体の将は、人の意識の中に人生の修行計画が書かれたソール・ノートがあることを発見し、さらに魂が住むソール・ワールドへも自由に行き来できるようになった。人生の修行計画が書かれたソウル・ノート。その神秘のパワーが奇跡を起こす。

第1章　ソウル・ノート

「マサルくん。絶対優勝だよ！　頑張ってね」
「任せといて！　彩ちゃんに優勝カップをプレゼントするよ。約束だ」
　彩子の言葉に将は楽勝ムードで、試合場へ向かった。
バシッ！　っと聞こえた。あるいは、パシッ！　パンッ！　と聞こえたかもしれない。それは相手選手の放った右の回し蹴りが、将の左即頭部に当たった音だ。優勝候補の筆頭に上げられていた中瀬将は、はるか格下の相手の放った回し蹴りを、まともに受けてしまったのだ。　対戦中に将は、格下の相手ということに油断してしまい、一瞬ガールフレンドの安田彩子のほうに視線が行ってしまった。偶然にも相手の放った蹴りが、その瞬間と一致したのだ。
　幸いにも将は反射的に左腕でカバーしたため、蹴りの威力は落ちていたが、それでも失神ＫＯ負けをしてしまった。まさに油断大敵を絵にかいたような試合だった。
　救急車で病院に運ばれた将は、気を失ったままＣＴ検査を受けた。医者の診断は脳震盪を起こしているだけで、時機に良くなると言った。この失神が今後の将の運命を大きく変えることになるとは、母親の直美やガールフレンドの彩子はもとより、将本人すら気づくことはなかった。

　中学校の卒業式も終わり、暦は三月半ばになっていた。将は高校入学を待つだけで、気分的に楽な毎日を過ごしている。将が通う空手の道場では、今日も激しい練習が行われていた。将は小学校一年生からこの道場で空手を始め、すでに九年間通っている。
男は強くないといけないという父の考えから、最初は無理やりに行かされたのだが、通っているうちに面白くなり自分からのめりこんでしまった。生まれつき運動神経のいい将は、メキメキと上達して

いった。小さい頃は病弱だったが、空手を習い始めてからはカゼも引かなくなるほど丈夫になった。

明日の空手の試合に向けて、将は今日も道場で練習をしていた。将の体格は身長百七十二センチ、体重六十五キロ、空手で鍛えた身体はまったく贅肉がない。実力的には館長よりもかなり劣るが、自分では二段以上の実力だと思っている。というのは、将は段位を取っていない。その理由は、柔道にしても空手にしても、格闘技の有段者が喧嘩をした場合、凶器を持っているのと同じ扱いを受けるからだ。

ケンカのために空手を習っているわけではないが、段位を取るのが目的ではなく段位に執着もないので、あえて段位は取っていない。小中学校では、将が空手をやっているというのは皆が知っていた。このため将にケンカを仕掛けるものはいない。逆にイジメの現場を見つけると、弱い者の味方になっていた。そんな将はクラスでも人気者だ。そんな矢先の試合場でのアクシデントだった。

彩子と将は小さいころからの幼馴染だ。彩子は小学校の頃から頭が良く、成績は常にトップクラスだ。それは中学校でも変わらない。明るい性格で礼儀正しくて良く気が利き、中学生には思えないほど気配り上手だ。きっと親が厳しく躾けているのだろうと直美は思っている。そんな彩子が将のガールフレンドというのが嬉しい。

入院してから三日経っても将の意識は戻らず、医者からは植物人間になるかもしれないと宣告された。直美と父親の将晴は嘆いたが、不思議なことに将の意識は、ベッドの上から両親と寝ている自分を見ていた。

六日が過ぎ七日目になったとき将の目が開いた。背伸びをしようとした将は、腕に点滴用の針が刺さっているのに気づき、ナースコールで看護婦を呼んだ。

「良かったあ！　将くん気がついたのね！　どこか痛いところとか、気分が悪いとかはない？」
　看護婦に点滴を外してもらい大きく背伸びをした将は、良く寝たという表情でベッドから起き上がった。時計を見てみると午前十時半を指している。
「大丈夫です。あぁ、良く寝た。気分爽快です。こんなにグッスリ寝たのは初めてです」
「それはそうよ。だって一週間も寝てたんだから」
「もう帰ってもいいですか？」
「主治医の先生に聞いてみるけど、その前にお母さんに電話したら？　ものすごく心配してたわよ」
「あぁ、知ってます。見てたから」
　そう言いながらベッドから出て立ち上がると、首を左右に動かしてみた。コキ、コキと関節が音を立てた。
「またぁ、意識が無かったのに見れるわけ無いでしょう。下手な冗談ね」

　母親の直美は病室へ入ってくるなり、将をしっかりと抱きしめると涙ぐんだ。将には直美の気持ちが痛いほど分かるが、目頭が熱くなるのを我慢して照れ隠しのように言った。
「お母さん、恥ずかしいから止めてよ。それより、早く家に帰ろうよ」
「そうね・・。お腹空いてるでしょう？　何が食べたい？」
直美は運転するクルマの中で、皆がどんなに心配していたかを将に話した。
「お母さん、言わなくても知ってるよ。彩ちゃんが自分のせいだと言って泣いてたのも、お母さんが油断大敵だと言ったのも知ってるよ」
「えっ？　どうして知ってるの？　看護婦さんに聞いたの？」

「気を失っている間、意識がベッドの上のほうにあって、お母さんと俺と彩ちゃんを見下ろすような感じで見てたんだ。自分で自分の寝ている姿を見るっていうのは、何だか変な感じだったよ」

直美は将の言葉に、背筋が寒くなる想いがした。

「人は死ぬときに魂が抜けて、自分の姿や悲しんでいる人たちの姿を見るって言うのを聞いたことがあるんだけど、もしかしたらあんたは死ぬ寸前じゃなかったの？」

「いや、死んだことがないから分からないけど、そんな大げさな感じじゃなくて、疲れて寝ているときに、魂だけが目が覚めて抜け出たっていう感じだったよ。だから疲れが取れたら目が覚めると思ってた」

「魂が抜け出たときに、あの世には行かなかったの？　死んで生き返ったという人の話だと、魂が抜け出たときに光が迎えに来て一緒にあの世に行ったけど、また戻ってきたら生き返った。というようなことを、何かの本で読んだ記憶があるんだけど」

1―2

話しているうちにクルマは自宅へと到着した。将は彩子が心配しているだろうと思い電話をかけた。三十分後に彩子が将の自宅へやってくると、将は入院してた時に体験したことを話し始めた。

「実は俺が気を失っている間、肉体的には眠っている状態だったんだけど、別の自分は起きていて皆のことを見ていたんだ。これはさっきクルマの中で、お母さんに言ったことだけど」

「それってどういうこと？」

彩子が不思議そうな顔をして尋ねた。

「幽体離脱って聞いたことある？」

「眠っているときに、魂が肉体から抜け出るってことでしょう？私は信じないけど」

「彩ちゃんはそう思ってるかもしれないけど、俺が経験したのはまさに幽体離脱だったんだ。俺の身体から抜け出た俺は、ちょっと分かりにくいかもしれないけど、意識だけが抜け出たって感じ。言うなれば、頭の部分だけが離れてたって感じかな。その頭の部分が天井のあたりにあって、二人をずっと見てたんだ。だから二人が話していたことは全部覚えてるよ」

「それともうひとつ驚いたのは、抜け出た意識は別の世界へ行くことが出来るんだ。実際にその世界へ行ってきたよ」

将は気を失っていたときに体験した、不思議な出来事を続けて話した。意識を失っている間、将はこの世ではないところに行っていた。そこは言葉で会話するのではなく、頭で考えるだけで自分の考えが相手に通じた。欲しいものは思うだけで目の前に現れた。思うだけで物が動いた。そこにいる相手の顔は分からない。人の形をした光のようなもので、その光の色も輝き度もそれぞれ違っていた。

意識を失くしている間、自分は夢を見ているんだと思っていたが、これは決して夢ではないという確信みたいなものがあった。夢の中でそんなことを思っているうちに気がついたら、病院のベッドに寝かされていた。そのとき幽体離脱をして、二人を見ていたのだ。話を聞き終えた彩子が尋ねた。

「マサルくん、その世界って、神様が居たの？」

「分からない。人の形をした光るもの、あれは魂なのかどうか分からないけど、光る人間はたくさんいたよ。神様らしき人はいなかった」

「将、そこにはどれぐらいの時間居たの？」

今度は母親の直美が尋ねた。

「その世界では時間の感覚がまったくないんだ。言葉ではうまく説明できないけど。あえて言うなら、気絶した瞬間から病院のベッドに寝かされるまでの間かな」

二人は将の話を聞きながら、人は死んだ後も別の世界で生きるんだということが、本当のことのように思えてきた。その後、彩子と雑談をしているうちに、時計の針は午後四時を指していた。

「マサルくん、私帰るわ。また会おうね」

「うん、気をつけてな。また電話するよ」

彩子が帰るのを見送った将は、リビングのソファーに座ってテレビを点けた。暖房が気持ちよく、テレビの音も子守唄に聞こえ始め、うとうとし始めた。眠りにつき始めたころ、将は自分の頭だけが身体から離れる感じがした。幽体離脱か！　そう思った瞬間、将は自分の頭上から、テレビを見ながら眠っている自分の姿を見ていた。

意識だけの将は二度目の幽体離脱とあって、一回目よりは落ち着いていた。

しばらく自分の姿を眺めていた後、テレビでやっているドラマを見ることにした。一時間ドラマの再放送だ。ちょうどドラマが終わっ

たときに直美がやってきて将の肩を叩いた。

「将、こんなところで寝てるとカゼ引くわよ。起きなさい」

それに合わせたかのように意識体の将は、自分の肉体へと戻った。

「テレビ見てなかったでしょう。あなたの好きな連続ドラマだったのに。再放送だったから、もうやらないわよ」

「身体は眠ってたけど、幽体離脱して見てたよ」

「本当に？　じゃあ内容を言ってみてよ」

将はおもむろにドラマの内容を話し始めた。幽体離脱したときのことを、完璧に覚えていたのだ。将が途中まで話したところで直美が制止した。全身に鳥肌が立っていた。

「あなた本当に見てたのね。自分で意識して幽体離脱したの？」

「違うよ。テレビを見てたらうとうとし始めたんだ。そしたら意識がス～っと抜けるような感じがして、天井のあたりから自分の姿を見てたんだ。俺の肉体は眠ってたから起こすのは可哀想だと思って、意識だけでテレビを見てたんだ」

直美は、将の幽体離脱は今後も続くだろうと思う反面、これが将の運命を大きく変えるのではないかという気がした。

1―3

翌日彩子と一緒に幽体離脱の実験をすることにしていた将は、彩子の自宅へ向かった。彼女の部屋に入った二人は、早速、幽体離脱の準備に取り掛かった。彩子の部屋は、ぬいぐるみや可愛いグッズが綺麗に並べられ、壁にはジャニーズ系の歌手のポスターが貼られている。その中に混じって、空手着姿の将の写真が一枚貼ってある。将は彩子の部屋へは何度も来ていた。

「椅子に座ったほうがいい？　それともベッドで横になったほうがいい？」

「ベッドのほうが眠りに就きやすいから、ベッドに横になるよ」

将は言うなりベッドに横になると目を閉じた。五分ぐらいでうとうとし始めた。隣では彩子が緊張した表情で、じっと将を見つめている。睡魔に襲われながら、将は離脱の瞬間を待った。眠いのだが意識は冴えている。相反する感覚だ。肉体は眠りに就いたが、意識だけが肉体から離れた。幽体離脱したのだ。

天井のあたりから、寝ている自分と彩子を見ていた意識体の将は、離脱したことを彩子に知らせる術を考えていなかった。彩子の目の前で手を振ってみたが気づかない。大声で叫んだが聞こえていない。肩を叩いたが、物理的な肉体ではないので、彩子が感じることはない。

「そうだ！　彩ちゃんの意識の中に入ればいいんだ」

将は彩子の額に手を伸ばすと、そのまま潜り込んでしまった。彩子の意識の中に潜り込んだ将は、そこでガラスのような透明な板に書かれた文字のようなものを発見した。見たこともない文字だが、将には何故か書いてある意味が理解できた。頭の中というか、自分

の意識に違和感を感じた彩子が声に出した。

「マサルくん。私の頭の中に居るのね？」

「そうだよ。離脱して、彩ちゃんの意識に潜り込んだんだ。離脱したことを知らせるには、こうするしか仕方がなかったんだ」

「分かったわ。じゃあ今から何か実験する？」

「ちょっと彩ちゃんの頭の中を調べてから、元に戻るとするよ」

「いやだあぁ　変なところ調べないでよ。裸を見られるより恥ずかしいわ」

「大丈夫だよ。ちょっと気になるものを見つけたので、それを調べるだけだから。決して変なものじゃないから」

「分かった。後でその気になるものを教えてね」

ガラスの板のようなものに書かれた文字を読んだ将は、彩子の意識から抜けると寝ている自分の肉体へ戻った。目を開けて大きくアクビをした将は起き上がると、机の上の時計を見てみた。眠りに就いてから十五分が経っていた。複雑な表情で考え込んでいる将を見て、彩子が心配そうに声をかけた。

「どうしたの？　身体の具合でも悪いの？」

「いやそうじゃないんだ。彩ちゃんの意識に潜り込んだとき、大変なものを発見したんだ・・」

言うのをためらっている将に、彩子は不安を感じていた。もしかしたら、自分の身の上に悪いことが起きるのではないかと。彩子はその想いを恐る恐る口に出してみた。

「もしかしたら・・、私の脳に腫瘍か何かあったの？」

顔の前で大きく右手を振りながら、将は明るい声で言った。

「違うよ。そんな腫瘍とか癌とかじゃないよ。意識体の俺は頭の中に入ると物理的なものは見えないんだ。彩ちゃんの意識を感じるだけなんだ。病気とかじゃないから心配しないでいいよ」

「良かった。マサルくんが難しい顔してるから、心配しちゃった。

それで一体何を発見したの？」
「実は彩ちゃんの人生に起きることが書いてある、ガラスの板というかノートみたいなものを発見したんだ。見たことのない文字が書いてあったんだけど、不思議と書いてある意味が理解できたんだ」
「ということは、マサルくんは私の未来のことが全部分かるわけ？」
将は声を出さずに、首を小さく縦に振った。

「ねぇ！　私の未来のことを教えて。何て書いてあったの？」
「ダメだ。それは言えない。言ったらとんでもないことが起きそうな気がするんだ。俺だけの頭の中にしまっておくから、安心していいよ」
「でも、もし悪いことが起きるんだったら、今からそれに備えて準備できるじゃない。そしたら、未然にその悪いことを防げるでしょう？」
「理屈ではそうだけど、これは理屈じゃないんだ。ほら、タイムマシンの映画なんかであるだろう？　過去に戻って過去のことを変えると、未来に大きな影響を与えるって。それと同じで、ソウルノート（Ｓｏｕｌ　Ｎｏｔｅ）に書いてあることを教えると、その後の人生に取り返しのつかない影響が起きると思うんだ」
「そうね。もう聞かないわ。そのほうがいいみたい。マサルくん、今ソウルノートって言ったよね？」
「無意識に、ソウルノートっていう言葉が浮かんだんだ」
「魂が決めたことを書いたノートって意味よね。ということは、人は誰でもソウルノートを持っていることになるわね？」
「そのとおり。ただし俺がそこに書いてある文字を見せたとしても、読める人は世界中探してもいないと思う。あの文字は、意識体にならないと読めないと思うよ」
「自分のソウルノートには何て書いてあるか知ってるの？」
「残念ながら、自分のソウルノートは見えないんだ」
二人は、幽体離脱した意識体は想像もつかない謎を秘めていて、

想像もつかない力を持っているような気がしていた。

「離脱の瞬間の感覚は覚えてる？　自分で意識的に離脱できそう？」

「感覚は分かったけど、うとうとしないといけないのがネックだな。だからいつでもできるかって言うと、眠いときでないとできない。これが眠気に関係無しに出来ればいいんだけど。何度も実験するしかないな」

将たちは後で気づくのだが、人は誰でもソウルノートと呼ばれる魂の修行計画を書いたノートを持って産まれてくるのだ。修行計画は産まれてから死ぬまでの人生で、自分の身の上に起こるべきことを自分で書くのだ。それは自分で自分に与えた修行なのだ。その修行を乗り越えることによって、魂はひとつずつ成長していく。難しい修行や辛い修行のほうが、魂の成長は早い。

産まれてくるときにそのノートを持っていないと、この世に生を受けることは出来ず、流産や死産となってしまう。本来はソウルノートを持っていないと、意識体が人の中に入ることは出来ないのだが、ごく稀にノートを持たないで産まれようとする意識体もある。

将は机の上に置いてあるボールペンを取ろうと手を伸ばした。ベッドに座ったままだったので、あと十センチほど届かない。彩子が取ってあげようと手を伸ばしたときだ。ボールペンが勝手に動いて、将の手の中に飛び込んでいった。

「えっ！　なになに？　何が起きたの？」

彩子が驚きをそのまま声に出した。二人は顔を見合わせたあと、ボールペンに視線を向けた。

「超能力・・・かなぁ？」

自分でやったにも関わらず、将は半信半疑のような、他人事のような口ぶりで呟いた。

「絶対に超能力よ！　もう一度やってみて。たぶん出来るはずだから」

彩子に言われて将は、もう一本のボールペンに意識を集中すると、こっちへ来いと強く念じた。彩子の考えは的中した。ボールペンは意識を持っているかのように、将の手の中に飛び込んできた。
「凄い！　幽体離脱だけじゃなくて、超能力も使えるんだ」
「昨日話しただろう。失神してたときに別の世界に行ったこと。あの世界では今のように、思っただけでモノを動かすことが出来るんだ。たぶん、あの世界の力が俺に宿ったんだ」
「さっきの話に戻るけど、離脱は眠っているときにしか出来ないんだよね？　起きてるときは、意識が頭の中にあるから無理だよね？」
「家に帰ってからいろいろと試してみるよ。彩ちゃんも幽体離脱について調べてくれるかな」

1―4

将は毎日、起きている状態での幽体離脱の練習をしていた。眠りに就いてからの幽体離脱は、ほぼ完璧に出来るようになっていた。実験を始めて三週間が経ったときだ。椅子に座って目を閉じていたが、眠っているのではなく起きていた。そのとき幽体離脱が始まった。始まりかけると後は簡単だった。

「やったぞ！　成功だ。彩ちゃんに知らせてやろう」

一瞬で彩子の意識に潜り込んだ将は、起きている状態での幽体離脱に成功したことを告げた。

「やったね！　これで自由自在にいつでも幽体離脱できるね？」

「そうだよ。いつでも出来るよ。あとは意識体にどれだけの力があるかを調べるだけだ。何かやって欲しい実験ある？」

「そうねぇ、ソウルノートのことをもっと詳しく知りたいわ。その内容を見たいと言う意味じゃないわよ。ソウルノートそのものの役目と力をね。それと、別の世界のことも詳しく知りたいわ」

「分かった。二つとも調べてみるよ。分かったらまた意識に潜り込むから」

「じゃあ、気をつけてね」

将は彩子の意識から抜けると、一瞬で別の世界へ移動した。意識体には距離と時間の感覚はない。

「ソウルワールドか」

そう呟いた意識体の将は、ソウルワールドの探索を始めた。そこには膨大な数の意識体が存在している。意識体は人間の形をしていて、いろいろな色に光っている。性別は不明だ。たぶん色で、今どの成長過程にいるのかが分かるのだろうと思ったが、自分で自分の

姿は見えないので、自分は何色かというのは分からない。
意識体は次から次へと消えては現れることを繰り返している。消えるのは、新たな命を授かって、赤ちゃんとして産まれるためだ。現れるのは、肉体が死んで、意識体がこの世界に戻ってきているのだと分かった。肉体は死んでも意識体はまた新たな肉体を見つけて、赤ちゃんとして産まれるのだということが、ここに来てはっきりと確認できた。輪廻転生は本当のことなのだ。

意識体の将は、近くに居る意識体の中を覗いてみた。するとソウルノートを持っている意識体と、持っていない意識体が居ることが分かった。持っている意識体は、次々と消えていった。ソウルノートを持っている意識体は、赤ちゃんとして産まれるのだ。持っていない意識体は、人間としての一生を終えた意識体だ。
しばらくすると、ソウルノートを持っていない意識体の前に、何も書いてないソウルノートが現れた。意識体が軽くノートに触れると、将が彩子の意識の中で見たソウルノートのように、文字が書き込まれていった。
その文字こそが、その意識体が次の人間としての人生の中で経験する事象なのだ。その事象は、意識体が修行として選んだ事柄だ。修行だからこそ厳しいことや辛いことが書いてある。意識体が自分を成長させるために、敢えて自分に課した課題なのだ。
その修行の内容の難しさは、色の違いによって決まっているみたいだ。高い成長過程にいる意識体のノートには、厳しく辛い修行が書いてある。逆に産まれて間もない低い成長過程の意識体の内容は、易しいものだ。

ソウルノートには、結婚年齢や子供が産まれる年月日も書いてある。一人息子が、小学校三年生のとき交通事故で亡くなると書いてあるものもあった。死を書くことが出来るのは、死は肉体的なものであって、意識体は肉体が死んでもソウルワールドで新たな命を見

つけて、新たな人生に誕生するという輪廻転生があるため、死そのものは取り立てて騒ぐものではないように思える。

将は、一人息子の交通事故死を書いた意識体は、肉体を持った自分が息子の死に直面し、その辛さや苦悩をどう乗り切るかを修行として自分に与えたのだろうと思った。自分がソウルノートに書いた修行を乗り越えると、意識体の色は変わって、輝き具合も違ってくるのだ。

ここでは時間の感覚はない。一通り調べた将は、一瞬で自分の肉体に戻り目を覚ました。意識がある状態での幽体離脱だったが、意識が抜けた肉体は眠っているのと同じだ。

1―5

椅子に座っていたはずの将は、ベッドに寝かされていた。テレビを点けて驚いた。幽体離脱してから丸一日が経っていた。階段を下りてリビングに入ると、両親が驚いたような顔をして声を上げた。

「将。大丈夫？　また気を失ってたから心配したんだよ。でもこの前のこともあったし、彩ちゃんに電話してみたの。そしたら、しばらくしたら気がつくから、そのままにしておいてくださいって言ってくれたから、ベッドに寝かせてそのままにしておいたの。良かった、気がついてくれて」

「大丈夫だよ、何ともないから。今からも同じようなことが起きるかもしれないけど、そのままにしておいたらいいからね。間違っても救急車呼ばないでよ。病気じゃないんだから」

時間は午後八時だ。丸一日、何も食べていなかった将は、どんぶり飯三杯を平らげた。食事を終えて入浴を済ませたところで自分の部屋へ戻ると、再び幽体離脱した。意識体の将は、一瞬で彩子の意識に潜り込んだ。

「マサルくん、丸一日調べてたんだね。お疲れ様。それで何か分かった？」

「ああぁ、たくさん分かったよ。人間の一生は神秘に満ちてるよ。それに不思議だよ」

将はソウルワールドで調べてきたことを彩子に話した。喋る必要はなく、考えるだけで彩子に伝わる。将が伝えたのは次のことだ。産まれてからの人生で身の上に起きることは予めノートに書いてあり、書いてあることは必ず人生で起きることになっている。

人は誰でもソウルノートを持っていて、それは潜在意識に書き込

まれていて自分では見えないし、その内容も分からない。その内容を書き換えることは出来ないし、自分の人生はほぼその内容どおりに進むのだが、何らかの狂いが生じてその内容と大きく違った方向へ進んでいるのであれば、誰かがそれを修正してあげないと、その人の人生は破滅することにも成りかねない。

ソウルノートには人生で自分が計画したことが順番に書いてあり、済んだことは色が変わるようになっている。書いてあることは努力すれば克服できるのだが、ノートに書いてない悪いことが起きると苦しむのだ。

ソウルノートにはソールメイトも記してある。それは丸や三角や四角などのような多数の記号だ。たとえば丸を書いてあると、同じく丸を書いてあるソウルノートの人と出会い、何らかの関係を持つことになる。それはライバルかも知れないし、親友かも知れないし、上司と部下の関係かもしれないし、結婚相手かもしれない。

ソウルノートは、肉体が死んでしまうと消えてしまう。次に産まれてくるときには、新たなことを書き込んだソウルノートを持って産まれてくるのだが、ノートに書いたことは、産まれると同時に忘れてしまうようになっている。

ノートに書いてあることを避けた場合、それは完結するまで次の人生に持ち越されることになる。一度ノートに書いたものは消せない。どんな形であろうと、ノートに書いたことをやり遂げればそれは消える。そして意識体が一段高い位に就くことができるのだ。意識体にも小学生、高校生、大学生というように、成長過程がある。小学生クラスの意識体が産まれてくるときは、そのクラスに見合った内容をソウルノートに書いてくる。間違っても大学生クラスの内容を書いてくることはない。なぜなら、小学生に大学生の問題は解けないからだ。

辛いこと、苦しいことを乗り越えると意識体が一回り大きくなる。辛いことや苦しいことと、嬉しいことや楽しいこと、不幸なことと

幸せなことはバランスが取れるように書くという決まりがある。ただそのバランスが今世で取れるのか、来世で取れるのかも書かないといけない。

将の説明を聞き終えた彩子は、意識体という普段はまったく意識することもなく、むしろそれに気づくことはないものの、実に綿密に計算されたソウルノートの修行計画に驚きを隠せなかった。

「すごく綿密に計算されてるのね。自分に起きることには、すべて意味があるのね。私もちゃんと考えてソウルノートに書いたのかしら？」

「彩ちゃんのノートの内容は言えないけど、自分を成長させるために、いろいろと考えて書いてあるよ」

「マサルくんの場合は、空手の試合で失神して、今の力が備わるということも書いてあったんだね」

「たぶん、そうだね。その他にも厳しいことや辛いことも書いてあるはずだけど、努力すれば必ず乗り越えられるはずだよ」

「それはそうと、前にも言ったけど、マサルくんのこの能力は、何かの目的に使うように備わったはずだわ。そうでないと、理屈に合わないわよね？」

「俺もそう思う」

1―6

四月になり、将と彩子は同じ高校へ入学したが、クラスは別になった。将は部活へは入らず、今でも続けている空手だけをやることにした。部活で遅くなると、幽体離脱の実験も出来なくなるのも理由だ。彩子も部活へは入らなかった。理由は将と同じで、幽体離脱の研究をするためだ。

「彩ちゃんの知り合いで、病気で苦しんでる人いる？　ちょっと試したいことがあるんだ」

「宏美っていう友達のお父さんが癌の治療中よ。抗癌剤と放射線治療を受けてるけど、結果は良くないそうよ」

翌日、授業が終わってから将と彩子は、宏美と一緒にお見舞いに病室を訪れた。宏美の父親は抗癌剤の副作用で、頭髪がすべて抜け落ちている。顔色はどす黒く、将と彩子は、この父親は助からないだろうと直感的に感じた。

十分ほど居た二人は、宏美と父親に励ましの言葉を告げると病室を後にした。二人は待合室のソファーに座ると、作戦の打ち合わせを始めた。

「彩ちゃん、今から幽体離脱するから、寝ている俺の身体を守ってて」

「分かった。あとでソウルノートの結果を教えてね」

将は目を閉じると幽体離脱を始めた。離脱するのに一分もかからない。意識体の将は宏美の父親の病室へ一瞬で移動した。父親の意識に入った意識体の将は、今まで見たこともないソウルノートに驚いた。

父親のソウルノートは透明ではなく、磨りガラスのように曇って

いる。それも白ではなく、汚い焦げ茶色だ。ソウルノートの内容を見てみたが、どこにも癌になるとは書いてない。彩子の意識に潜り込んだ将は、父親のソウルノートのことを告げた。

「マサルくん、ソウルノートって透明なはずよね？　焦げ茶色になってるというのは癌のせいじゃないかしら。だから、新しいソウルノートと入れ替えれば癌は治るんじゃないの？」

「彩ちゃん、たぶんそのとおりだよ。でもソウルノートを入れ替えるとなると、お父さんのソウルノートをソウルワールドへ持っていって、新しいソウルノートへ内容を移し変えないといけないよね・・・」

「何か問題でもあるの？」

「ソウルノートを抜き取られた人は、たぶん死ぬと思うよ。流産とか死産というのは、ソウルノートを持っていない意識体が入るからなんだ。ソウルノートを持っていない肉体は生きられないんだ。だから、ソウルノートを抜き取ると死ぬんじゃないかと思うんだ」

「でも今のままだと、癌で確実に死ぬわ」

「一か八かでソウルノートを抜けって言うの？」

「そうじゃなくて、産まれてくるときノートがないと流産なんかになるけど、現実に生きてる人から抜いたら、死ぬまでに時間があるんじゃないかなと思ったの。仮に二時間以内にノートを戻せば助かるんだったら、その時間内にソウルワールドへ行って、書き換えればいいわけでしょう？」

「そうだけど、ノートを抜いてから死ぬまでの時間はどうやって調べるの？」

「問題はそこね。一旦家に帰ってから考えよう。私の家へ来る？」

「そうだね」

二人は彩子の家へと向かった。

「お母さんただいまあ！　将君と一緒だよ」

彩子の母親の恵子が笑顔で出て来た。
「こんにちは。お邪魔します！」
「こんにちは将君、晩御飯、一緒に食べて帰る？」
「いいんですか？　僕たくさん食べますよ」
「若い男の人の豪快な食べっぷりを見たいから、ちょうど良かったわ。ただし、ひとつだけ条件があるわよ」
「僕、オカネ千円しかないんですけど」
「アッハッハッハッハ、オカネなんか取らないわよ。条件というのは、不味くても残さず全部食べること。これが条件よ」
「僕、味覚音痴ですから大丈夫です」
「それって私の料理は、食べる前から不味そうって言ってるの？」
「お母さん、何バカなこと言ってるのよ。マサルくんを苛めたら承知しないからね」
　二階の彩子の部屋へ行った二人は、ソウルノートを抜いてから死ぬまでの時間を、どうやって調べるかを模索していた。
「難しいなぁ。何にも閃かないや。彩ちゃん、よろしく頼むよ」
　将が根を上げた。彩子は何か独り言を言いながら、必死に考えている。
「マサルくん、もしこの問題が解決できたら、たくさんの人を救えるわよ。頑張って考えよう」
「そうだな、頑張ろう」
　うんうん唸りながら考えていた彩子が叫んだ。
「マサルくん、ソウルノートを抜いても、少なくみても一ヶ月は大丈夫よ」
「ええぇ、そんなに長く大丈夫なの？　どうして？」
　彩子は将から聞いた流産の話を切り出した。
「流産は、ソウルノートを持ってない意識体が入るから起きると言ってたでしょう？　流産はだいたい妊娠して十二週目ぐらいまでが危ないの。もしソウルノートを抜いてすぐ死ぬんだったら、受精した時点で死んでるわ。十二週未満で流産するということは、ソウル

ノートなしでも約三ヶ月ぐらいは生きてるってことでしょう？　だから安全率を多目に考慮したとしても、一ヶ月ぐらいは生きてるんじゃないかしら？」
「彩ちゃん、それ正解だよ！　間違いない」
「今からソウルノートを抜き取ってみる？」
「やってみるよ。でもソウルノートを新しいのに書き換えるとして、どれぐらい時間がかかるか分からないな。もしかしたら二日かもしれないし、一瞬で終わるかもしれないし、あるいは一ヶ月かもしれないし・・」
「大丈夫よ。もし時間がかかってマサルくんが目を覚まさなくても、私が見ててあげるから安心して行っておいでよ。人の命がかかってるんだからね」

1―7

マサルはベッドに横になると、幽体離脱を始めた。一分弱で離脱した将は、宏美の父親のところへ瞬時に移動した。意識体の将は注意深くソウルノートを手に取ると、ソウルワールドへと移動した。父親は眠ったままだ。

ソウルワールドへ来た意識体の将は、一枚の新しいソウルノートを手に取ったが、内容をどうやって移し換えるかが分からない。周りの意識体がやっているように、ノートの表面に字を書くような動きをしてみたが、何も書き込まれない。ソウルノートに書いてある文字を、そのまま書くのは不可能だ。文字と思えない複雑な模様に近いものだから難しくて書けないのだ。

しばらく考えていた意識体の将は、新しいノートと父親から取り出したノートを重ねてみた。すると父親のノートの文字が、そのまま新しいノートに移ったのだ。文字の無くなった焦げ茶色のノートは、あっという間に消滅してしまった。新しいソウルノートを手に入れた将は、宏美の父親のところに瞬時に移動すると、新しいソウルノートを父親の意識体に戻した。その瞬間、それは魔法でも見ているかのような劇的な変化だった。どす黒かった顔色は赤みがさして血色のいい顔色に変わった。健康な人そのものだ。抜けていた頭髪は少しずつ生え始め、三十分も経たないうちに生え揃ったのだ。凄まじいパワーを秘めたソウルノートに、意識体の将は度肝を抜かれた。

「凄い！　素晴らしい！」

それだけの言葉を口にするのがやっとだった。父親を助けた意識体の将は、彩子の部屋へと移動した。ソウルワールドでは時間の観念がないため、どれぐらいの時間離脱していたのか見当もつかない。自分の肉体に戻った意識体の将は目を開けた。彩子は居ない。リビ

ングへ行ってみると、彩子と恵子がテレビを見ていた。

「あら将君、良く寝てたわね。お目覚めはいかが？」

恵子がおどけたように声を掛けてきた。

「今日は何日ですか？　僕、どれぐらい寝てました？」

「寝ぼけてるみたいね。今から晩御飯を食べるところよ。五時ごろ帰ってきたから、二時間ほど寝てたんじゃない。さぁ、晩御飯食べようか」

恵子は立ち上がると台所のテーブルへと将を誘った。将は彩子にVサインを送った。

翌日学校の授業が終わり自宅に帰った将は、ベッドに横になり幽体離脱を始めた。一分弱で意識体として離脱した将は、宏美の父親が入院していた病院へ移動した。入院している全ての癌患者のソウルノートを見るのに、三秒もかからなかった。

その結果、ソウルノートに癌になると書いてなかった患者は五人だ。残りの十人は、ソウルノートに癌になると書いてある。五人の患者を救うことにした意識体の将は、一人目のソウルノートを抜き取ると、ソウルワールドへ瞬時に移動した。

ソウルノートの書き換えの方法は経験済みなのでスムーズに進んだ。一人目が終わると二人目と、ソウルノートを一枚ずつ書き換えていった。五枚を一度に抜き取ると、元に戻すときに間違えた場合、その人の人生にどんな影響が起きるか想像もつかないからだ。

五人全員のソウルノートを新しく書き換えた将は、五人の様子を見ていた。宏美の父親のときと同じように、信じられないほどの劇的な変化が起きた。全員が一時間ほどで健康体へと変化したのだ。血色が見違えるほど良くなり、頭髪は全て生え揃い、今すぐにでも退院できそうな状態になったのだ。

離脱してから一時間半が経っていた。彩子の意識に潜り込んだ意

識体の将は、病院での出来事を全て彩子に告げた。
「自分で癌を選んでいる人もいるわけね。でも癌は自分で努力して治すんじゃなくて、医者に頼るしかないわけでしょう？　それがなぜ自分の修行になるのかしら？」
「俺の推測だけど、助からないと分かってから、残りの人生をどう生きるかということが修行じゃないのかな。ただ嘆き泣いてばかりで過ごすのと、限られた時間で自分に出来ることを見つけて人のためになることをやるのとでは全然重みが違うよね。それが癌という試練を選んだ理由のような気がするんだけど」
「きっとそうだわ。癌になったことを嘆いて死んでいったら、意識体の成長はないはずよ」

1―8

二日後の朝刊の一面に、衝撃的な文字が大きく書かれていた。
『神様が起こした奇跡！　末期癌の患者六人完治』
その出来事は、テレビのワイドショーでも取り上げられた。病院の院長と、完治した患者を診ていた医師がインタビューを受けていた。

「末期癌の患者が完治した理由は何ですか？」
「分かりません」
院長も担当の医師も同じ返事を返した。
「この病院だけの何か特別な治療法でもあるんですか？」
「特別なことは何もありません。現在の医学で考えられる最善の治療法をやってるだけです。抗癌剤の投与と放射線治療がメインです」
「癌は早期発見早期治療で治ると言われてますが、今回の六人の方は末期癌で、余命半年ぐらいだったんですよね？」
「そうです。六人とも癌が全身に転移していて、治る確率は一パーセントもありませんでした。今回その六人が完治したのは、医者の口からこんなことを言っていいのかどうか分かりませんが、神様が奇跡を起こしたとしか思えないんです。それほど劇的な変化だったんです。完治したばかりか、抜け落ちてた髪の毛が一日で生え揃ったんです。こんなことは常識的に有り得ないことです」
院長は答えているうちにかなり興奮していた。別のカメラは完治した六人へのインタビューの映像を写している。その中には、宏美の父親の姿もあった。　六人はそれぞれの自宅でインタビューを受けていたが、不思議なことに六人の答えは同じだった。

「眠っているときに、何かが頭の中から抜けていったような気がしました。しばらくしたら、今度は何かが頭の中に入ったような気がしました。上手く言えないんですが、汚れたものが出て行って、綺

麗なものが入ってきたという感じです。その瞬間から身体がポカポカと温かくなり、今まで味わったことのないような凄くいい気分になったんです。良く寝たという感じで目を覚ましたら、癌が治っていたんです。髪の毛も全部生え揃っていたんで驚きました。これは神様が起こした奇跡に間違いないと思ってます」

このニュースはあっという間に全国に知れ渡った。翌日から、六人が入院していた病院へは癌患者が殺到して大騒ぎとなっていた。

「大変な騒ぎになったわね」

「彩ちゃん、それほど困っている人が多いってことだよ。それはそうと、この騒ぎどうしようか？」

「このまま放っておくのも何だし、マサルくんにもうひと働きしてもらうか！」

「おいおい冗談はやめてくれよ。離脱してもこんな騒ぎは止められないよ」

「止められるわ。別の病院の癌患者を治せばいいのよ。ね？」

「なるほど！　奇跡が起きたのは、この病院だけじゃないってことにすればいいんだ。善は急げだ。今夜やってみるよ」

「やるのはいいけど、どこの病院にする？」

「市立、県立、国立などの大きな病院に行ってみるよ」

「全部回ろうとすると時間かかるわね」

「彩ちゃん、意識体は異次元の世界だよ」

「忘れてた！　一瞬で済むのね？」

「そのとおり。ソウルノートの書き換え方法も分かっているから、二時間もあれば、かなりの人のソウルノートを新しく出来る。今夜やってみるよ」

「二日後に、また大騒ぎになるわね」

その日の夜、意識体の将は五つの病院の癌患者のソウルノートを見て回った。ソウルノートに癌になると書いてなかったのは、四十二人だ。ソウルノートの書き換えの要領がつかめていたため、書き

換えはスムーズに進んだ。四十二人の書き換えが終わるのと、書き換え後の様子を確認するのとで、約一時間ちょっとかかった。ソウルノートを入れ替えて結果が出るのに、一時間ほどかかるからだ。

翌々日の朝刊の一面の大きな文字が目を引いた。

『再び神様の奇跡！　癌患者四十二人完治』の見出しが出ていた。ワイドショーの話題は、この話で持ちきりだ。各テレビ局のレポーターは、完治した患者へのインタビューに大忙しだ。インタビューされた患者の答えは、口裏を合わせたかのように全員が、前回の患者と同じ回答をしていた。

「マサルくん、意識体は異次元の世界だから、距離と時間は関係ないのよね？」

「そうだよ」

「だったら、日本中の病院を回って、癌患者を救ってくれない？もちろん、ソウルノートを確認してからよ」

「明日は土曜で休みだからちょうどいいね。朝の十時に彩ちゃんの家に行くから、離脱したあとの俺を見ててね。自分の家でやると、もし朝から晩までかかったとしたら両親が心配するから」

1―9

翌朝十時五分前に、将は彩子の家に着いた。
「こんにちは！　将です。お邪魔しまあす」
大きな声で挨拶すると、恵子の大きな明るい声が返ってきた。
「将君いらっしゃい。彩子が首をながぁくして待ってるわよ」
「お母さん、私をキリンみたいに言わないでよ。マサルくん、待ってたわよ。さぁ上がって」

彩子は将と自分の部屋に入ると、将に確認した。
「今日、日本中の病院の癌患者を見てみるんだよね？」
「そのつもりだよ。時間がどれぐらいかかるか分からないけどね」
「あっ、そうだ。前から聞こうと思ってたんだけど、意識体のマサルくんがどこかへ行ってるときに、肉体のマサルくんの肩を叩いたりしたら分かるの？」
「分かるよ。幽体離脱していても、肉体が感じた反応は意識体の俺に届くんだ。ただし、痛みとか熱い冷たいとかの感覚までは分からないけど」
「そしたら、意識体のマサルくんに帰って欲しいときは、肩を叩くわ」
「ＯＫ。じゃ早速、離脱するから横になるよ」

将はベッドに横になると幽体離脱を開始した。一分も経たないうちに離脱した意識体の将は、北の北海道の病院から南下することにした。最後は沖縄の病院だ。異次元の世界の意識体には距離と時間は関係ない。離脱した意識体の将は、瞬時に北海道の、とある病院に移動した。癌患者の一人ひとりのソウルノートを見て回った。
ソウルノートに癌になると書いてないものは、新しいソウルノートに書き換えていった。書き換えたソウルノートを元に戻すと、次

の人のソウルノートを確認した。
新しく書き換えたソウルノートを元に戻しても、以前のようにその後の様子を確認することはしない。宏美の父親を含めて六人、その後も四十二人で確認していたからだ。確認するのに約一時間を要していたが、確認作業が無くなった分、ソウルノートの書き換えは凄いスピードで進んだ。

静岡の病院まで終わったところで、意識体の将は彩子の意識に潜り込んだ。
「お帰りマサルくん。もう終わったの？」
「まだだよ。今、北海道から南下してきて、静岡の病院まで終わったから、約半分ぐらいだね。ところでどれぐらい時間が経った？」
「えっ！　もう日本中の病院の半分を回ったの！」
彩子は改めて意識体の能力の凄まじさを実感した。
「十時に離脱してから、まだ五分しか経ってないよ。信じられないスピードね」
「ソウルノートを新しいのに替えても、その結果までは見てないからね。過去何人も確認したから大丈夫だと思って。だから早いんだ」
「なるほど。まぁ容態は確認しなくても大丈夫だわ。そしたら、静岡以南も頑張ってね」
「分かった。行ってくるよ」

将は次の病院へ移動すると、癌患者のソウルノートを順番に見て回った。癌を修行に選んだ人は全体の三分の二だ。沖縄まで全て完了したのは、離脱してから十分少々だった。
「日本中の癌患者を助けてきたよ。ただし、ソウルノートに癌と書かれてない人だけだけどね」
「何人ぐらい助けたの？」
「多すぎて覚えてないよ。たぶん、何千人だね。日本中が大騒ぎになるよ」

将の言ったとおり、日本中が大騒ぎになっていた。末期癌の患者や、治療中の癌患者が完治したからだ。マスコミは大々的にこのニュースを取り上げていたが、どこの病院の医師に聞いても、神様が起こした奇跡だとしか答えが返ってこない。患者へのインタビューにしても、返って来る答えは同じだ。テレビにはいろいろな評論家や研究者が出演して自論を展開している。

一ヶ月も過ぎるとこの騒ぎも一段落した。その後、今回のような癌が完治するという事象が起きなくなったことも、その理由と思われた。

1―10

ある日の日曜日、映画好きの彩子に誘われた将は、ファーストフードで一緒に昼食を済ませ、映画館へと向かって歩いていた。

「マサルくん、癌の件は一段落したけど、次は何をするか考えてるの？」

「考えてない。何かしないといけないね。その話は一旦置いといて、今日は映画に没頭しようかな。そのためには寝ないようにしないとダメだな」

他愛のない雑談をしながら歩いていた二人は、建築中のビルの近くまで来ていた。

「このビル何回建てなんだろう？　高いわね」

そう言いながら将と彩子が上を見上げたときだ。落下物よけのネットを越えて、何かが落ちてきているのが見えた。

「あぶな～～い！」

彩子が悲鳴をあげた。落下物は、将たちの前方十メートルぐらいのところを目がけて落下している。休日の午後の路上は歩いている人が多い。悲鳴をあげた彩子は、将の腕にしがみつき目を閉じた。これから起こる大惨事を予想して、そういう行動になったのだ。

考えている暇はない。将は無意識に、落ちてきていた鉄パイプに全神経を集中して止まれと念じた。咄嗟に起きた将の反応だった。路上を歩いていた人の誰もが、彩子と同じように大惨事を予想していた。それを現実化するような何人もの悲鳴が建築中のビルの前で響き渡った。

次の瞬間、落下物の下に居た人たちは信じられない光景を目の当

たりにすることになった。とっくに落下物に当たっているはずなのに、物が落ちた音さえ聞こえないのだ。
恐る恐る上を見上げた人たちが驚きの声をあげた。落下していた鉄パイプが、頭上二メートルほどのところで止まっているのだ。それはまるで、見えない紐で吊り下げられているかのように。
下に居た人たちは我先にとその場を離れた。歩行者が居なくなったところで、落下物はゆっくりと路上に落ちてきた。それは直径五センチ、長さ三メートルほどの足場に使う鉄のパイプだ。人々のどよめきを後に、将と彩子は映画館へと向かって歩いた。

「マサルくんが止めたのね？」
「うん。無意識に反応してたんだ。まさかあんなに上手くいくとは思わなかったよ」
「意識体とソウルノートのことばかりに気が行ってたけど、超能力も使えたんだよね。忘れてた」
「俺も同じ。アッハッハッハッハ」
「今度、超能力の役立て方も考えなくちゃね。それと、他にどんな超能力が使えるのかも実験しなくちゃ」
「頼りにしてるよ。彩ちゃん」
「任せといて！」
映画館に到着した二人は受付で入場券を買うと、映画館の中へと入った。さっきのビルの前は人だかりがしている。警察が来て、現場検証と通行人への事情聴取を行っていた。

翌日の朝刊に、またしても目を引く見出しが載っていた。
『三度目の神様の奇跡！　鉄パイプが空中停止』
この記事は、鉄パイプが空中で止まっている写真付きだ。この事件が起きたとき、大勢の目撃者が携帯電話のカメラでその状況を撮影していたのだ。
その後の週刊誌には、超能力者が名古屋に居る可能性が高いと書

いてあった。最初の癌の完治といい、鉄パイプの空中停止といい、二件とも名古屋だったからだ。

1―11

「やっぱり鉄パイプの件も大騒ぎね。でも私たちがあのとき、あの場所に居なかったら大惨事になってたわ。これもソウルノートに書いてあるの？　でもソウルノートには大きな事柄しか書いてないんでしょう？　たとえば、人生の転機や節目になるようなこととか・・」

「そうだよ。転んで足を怪我するとか、インフルエンザにかかって寝込むとか、誰もが一般的に経験しそうな小さなことは書いてないよ」

「なるほどね。じゃあ早速、超能力の実験を始めようか。その前に、ソウルワールドでやってることで、この三次元の世界と違うことを教えてくれる？」

「ひとつは検証済みの、思っただけでモノを動かすこと。あとは言葉じゃなくて、考えるだけでのコミュニケーション。いわゆるテレパシーだね。それと、瞬間移動。今のところこれだけだ」

「わかったわ。それじゃあ、テレパシーから実験してみよう。やり方は意識体として私の意識に潜り込んだときと同じやり方だと思うから、それでやってみてくれる？　何か私にメッセージを送ってちょうだい」

将は意識体のときと同じような感じで彩子にメッセージを送った。

「きょうも晩御飯食べてってもいいかな？」

「いいわよ」

彩子もメッセージを返した。

「出来たじゃない。こんなに簡単だと思わなかったわ。もっと早くやってれば良かったね」

「次は瞬間移動だよ。テレポートっていうやつだな。リビングに移

動してみるよ。おばさんは買い物に行ってるんだよね？」
「そうよ。誰にも見られる心配はないから大丈夫よ」
将は目を閉じると、意識体のとき移動するのと同じように移動を始めた。彩子の前に居た将の姿が、マジックを見ているように忽然と消失した。
「彩ちゃん。俺はリビングにいるよ」
将がリビングから声を出した。階段を駆け下りてきた彩子は成功する確信はあったものの、実際のテレポートを目の当たりにすると、全身に衝撃が走るのを感じずにはいられなかった。

「理由は分からないけど、異次元のソウルワールドでの力が意識体の俺だけじゃなくて、生身の俺にも宿っているんだ。だからソウルワールドで使っている力は、この世界でも全て使えるんだ」
興奮気味に喋る将に、彩子も興奮している自分を隠せない。

「凄い！　素晴らしいわ！　マサルくん、この力は絶対に世の中のために使わないとダメだよ。間違っても私利私欲に使ったらダメよ。もしそんなことしたら、絶交だからね」
「分かってるって。そんなことするわけないよ。彩ちゃんと絶交するぐらいなら、こんな能力は無くなったほうがましだよ」
将の口から出た思いがけない言葉に二人は顔が熱くなるのを感じて、お互いの顔から視線を逸らした。話題を変えるかのように彩子が続けて喋った。
「今度からうちへ来るときは、瞬間移動したらいいね。交通時間がまったくかからないから、時間がその分、有効に使えるわ」
「でも、おばさんやおじさんがビックリするんじゃないか？」
「玄関にテレポートすれば大丈夫よ。今日もテレポートで帰ったらいいんじゃないの？」
将は彩子と一緒に映画を見た後、彩子の家へはバスで来ていた。自転車ではないのでテレポートしても問題はない。

「彩ちゃん、ちょっと来て・・」
将の言葉に彩子は将の前に立った。将は彩子の肩を抱いた。彩子は目を閉じて将の次の行動を予想していたが、その予想は見事に裏切られた。
「目を開けてごらん」
将に言われて目を開けた彩子は驚いた。景色が変わっているのだ。見覚えのある場所だ。それもそのはず、自分の部屋だった。将は彩子と一緒にテレポートできるかの実験をしたのだ。
「大成功！」
喜ぶ将とは反対に、期待はずれだった自分の予想に少しがっかりしながらも、自分もテレポートした現実に彩子は興奮していた。

それから二週間が過ぎた日曜日の午後、将の部屋に彩子が遊びに来ていたが、
元気のない彩子に将は心配そうに尋ねた。テレパシーを使えばすぐに済むのだが、普段の会話は言葉ですることにしている。

「どうしたの？　何だか元気ないみたいだけど」
迷ったような素振りを見せていた彩子だったが、思い切って口に出した。
「マサルくん、お願いがあるの。お母さんのソウルノートを見て欲しいの」
「えっ？　何でまた急に？」
「お母さんが乳癌検診に行って、左の乳房に癌が見つかったの。お医者さんから左の乳房を切除するように言われて、ショックを受けてるの」
「分かった。でもソウルノートに癌になると書いてあったら、治すことはできないよ。それがお母さんの選んだ修行だから。分かってるよね？」

「分かってるわ・・」
心配そうに答える彩子に、将はそれ以上のことは言わずに幽体離脱を始めた。離脱した意識体の将は、リビングでテレビを見ている彩子の母親の恵子のソウルノートを見てみた。そこに癌のことは書いてない。

恵子のソウルノートは、こげ茶色のすりガラスのようになっている。癌になっている人のソウルノートは、全員、恵子のノートと同じ色をしている。恵子のソウルノートを抜いた意識体の将は、ソウルワールドへ行くと新しいソウルノートに恵子のソウルノートの内容を移し替えた。
新しいソウルノートを恵子に戻した意識体の将は、自分の肉体へと戻った。
目を開けた将は、恵子のソウルノートを新しいのに取り替えたことを彩子に告げた。嬉しさのあまり飛び上がって喜んだ彩子は、そのまま将に抱きついた。しっかりと彩子を受け止めた将は、そのとき初めて彩子と唇を合わせた。五秒足らずの短いキスだったが、二人に時間は関係なかった。

1―12

時は流れて夏休みまであと一週間と迫っていた。将と彩子が高校に入学して、初めての夏休みだ。

「マサルくん、夏休みの予定って何かあるの？」

「空手の練習と、お父さんの実家の熊本に一週間だけ帰る予定なんだ。それぐらいかな。予定と言えるほどのものじゃないけど。彩ちゃんは？」

「私も特に予定はないわ。友達とプールに行く約束をしてるんだけど、それぐらい。あとはお母さんの都合しだいよ」

「時間がたっぷり有るから、俺の能力をいろいろと試してみようか？　もちろん人助けにだよ」

「それがいいわね。ねぇ、友達とプールに行くとき、マサルくんも一緒に来ない？　友達が二人来るんだけど、ボーイフレンドを連れてくるんだって」

はにかみながら誘ってくれた彩子に、将は快く返事を返した。

「そう言ってくれるのを待ってたんだ。絶対に行くよ」

一週間はあっという間に過ぎ、夏休みに入った。将が熊本に行くのは、八月の盆のときだ。それ以外は特に予定はなかったが、午後一時から五時までは、毎日空手の練習だ。

将は幽体離脱をしてソウルワールドへ行くようになってから、念力とテレパシーとテレポートの超能力を身に付けていたが、身体能力も高まっているのを感じていた。一緒に空手の練習をしていても、周りの練習生の動きが遅く見えるのだ。館長の動きでさえ以前より遅く見える。そう見えているのは、将の身体能力が高まっているせいだった。

たぶん、俺のスピードについてこれる人間は、世界中探してもいないだろう。将は漠然とそんな気がしていたが、練習のときはその

スピードを全開にしないようにしている。

彩子とプールに行く日、九時半に彩子の家の玄関前にテレポートした将は、大きな声で彩子を呼んだ。

「おはようございまあす！　将で～す」

リビングで待っていた彩子が飛び出してきた。ミニスカートに可愛らしいTシャツを着ている。

「可愛いじゃん」

将は思っていることを、そのまま口に出した。

「ありがとう。マサルくんもカッコいいよ」

「当たり前！　俺はいつもカッコいいよ」

将はバミューダ風の半ズボンにTシャツだ。空手で鍛えた太い腕と、厚い胸板が目を引いた。とても高校一年生とは思えない体つきだ。

「じゃあ、行こうか」

二人は玄関を出るとバス停まで歩いた。目的のプールは、三重県桑名市にある長島スパーランドのジャンボ海水プールだ。名古屋からは近鉄で桑名まで行き、そこからはバスだ。友達とは、近鉄名古屋駅の改札口で、十一時に待ち合わせだった。約束の五分前に改札口に着くと、友達二人とボーイフレンドが待っていた。

「遅くなってゴメン」

彩子の言葉に、友達の美紀がすかさず答えた。

「五分前だから遅刻じゃないわよ。初対面の人もいるから自己紹介お願いね」

その言葉に、各人が自己紹介を始めた。

「遅くなってゴメン」

彩子の言葉に友達の美紀がすかさず答えた。

「五分前だから遅刻じゃないわよ。初対面の人もいるから自己紹介

お願いね」
その言葉に、各人が自己紹介を始めた。
「矢田祐介です。よろしく」
「近藤翼です。よろしく」
「水谷春菜です。よろしくね」
「伊藤美紀です。よろしくね」
将の番になった。四人の視線は、鍛え上げた将の上半身に注がれている。
「えっと、中瀬将と言います。よろしく」
「しんがりは私、安田彩子です。よろしくね」
自己紹介が済んだ六人は、改札口を抜けると近鉄急行に乗り込んだ。女同士、男同士で並んで座った六人は、すぐに打ち解けて話が弾んだ。

「中瀬君さぁ、凄い身体してるけど、何かスポーツやってるの？」
童顔でポッチャリ体型の矢田が聞いてきた。
「中学のときも今も部活は何もやってないけど、町の道場で小学一年のときから、空手を習ってるんだ」
「と言う事は、えぇ～と、丸九年もやってるんだ。すごいな！　何段？」
「友達は初段とか二段とかいるけど、僕はまだ白帯なんだ。小さい頃、病弱だったから健康のためにやってるんだ。おかげでカゼも引かなくなったよ」
矢田と近藤は、見せかけだけの筋肉バカかと思った。雑談をしているうちに、電車は桑名駅に到着した。ここから長島スパーランドまでは、三重交通バスだ。
田園風景の中をしばらく走ると、ホワイトサイクロン、スチールドラゴンなどの絶叫マシンが見えてきた。長島スパーランドだ。ここはジャンボ海水プールのほかに、数々の乗り物がある遊園地となっ

ており、一日中遊べるようになっている。隣接するのは長島温泉だ。

プールに着いた六人は、ロッカールームで着替えを済ませると、待ちきれんばかりの勢いでプールへ飛び出していった。ここのプールは海水を汲み上げて使っており、波の出るサーフィンプールや流水プール、ウォータースライダーなどがあり、一日中、楽しく遊べるようになっている。

彩子たち三人の女の子は、明るい色のビキニを身に付けている。身長百六十二センチ、体重四十八キロの彩子は、三人の中でもひときわスタイルがいい。

将たち男三人は、全員、トランクスタイプの海パンだ。小学一年生のときから空手で鍛え上げた将の肉体は、無駄な贅肉がまったくなく、太い腕と分厚い胸板は、十六歳の少年とは思えない。ギリシャ彫刻のような、素晴らしい身体をしている。矢田と近藤はそんな将を、見せかけだけの筋肉バカだと思っていたが、内心はその見事な肉体に嫉妬していたのだ。三人の女の子の視線も、そんな将の肉体に注がれていたが、将は彩子以外の視線は無視していた。

六人は目いっぱいプールでの時間を楽しんだ。急降下してくるウォータースライダーには全員が二の足を踏んだが、将が挑戦したのを見て、女の子の手前、矢田と近藤もしぶしぶ挑戦するしかなかった。楽しい時間の過ぎるのは早い。将が気づくと、時計の針は午後六時を指している。

「そろそろ帰ろうよ」

将が皆に言った。長島スパーランドを出発して、桑名駅に着いたのは、午後七時過ぎだ。

1―13

「お腹が空いたよね。ちょっと行ったところにコンビニがあるんだ。電車の発車までまだ時間があるから、何か買いに行こうよ」
水谷春菜の意見に、将と彩子以外の三人が賛成した。

「あれ？　場所が換わったのかなぁ。確かこのあたりだったはずなんだけど・・」
春菜はもともと方向音痴なうえに、ここのコンビニへは中学一年のときに一度来ただけだった。コンビニを探しているうちに路地に入り込んでしまった将たち六人は、前方から四人組の若い男たちが歩いてくるのが目に付いた。
男たちとの距離が三メートルまで縮まったときだ。先頭を歩いていた矢田に狙いを付けたのか、男の一人がわざとぶつかってきた。矢田はそのまま歩き出そうとした。

「おい兄ちゃん！　ぶつかっといて謝らんのか！　なめとるのか！」
「すみませんでした。ごめんなさい」
「ふざけるな！　ごめんなさいで済むと思ってるのか！　謝る気があるのなら、酒代で払え。それともその可愛いお姉ちゃんに相手をしてもらってもいいんだがな。どっちにするんだ！」
「僕たち高校一年生なんです。オカネも電車代しか持ってないんです。許してください」
女の子三人は怯えながら、将の後ろに隠れた。本能的に、一番安全なところを選んだのだ。

「ほう、どうやらこの体格のいいお兄さんが相手をしてくれるみたいだぞ。どうするお前ら？」
ぶつかってきた男が他の二人に目配せしながら、ドスを効かした

声で言った。

「この兄さんが相手をしてくれるのか。最近ちょっと運動不足だから、腹ごなしに相手になるとするか。俺たち手加減できないから、そこんとこよろしく」

完全に将たちをなめきった二人に、矢田は顔面蒼白になっている。矢田は財布を取り出すと、二千円を渡そうとした。

「今時二千円でハンバーガーでも買えと言うのか？　俺らを、おちょくってるのかボケ！」

「すみません。これだけしか持ってないんです」

「そっちの五人、お前らはいくら持ってるんだ？　俺らの酒代を払ってくれるんだろうな！　それとも相手をしてくれるのか？　どっちにするんだ！」

男たちはここぞとばかりに凄んできた。将は我慢の限界と、矢田たちの身の危険を感じると行動に出た。

「僕たちは高校の一年生なんです。おカネを払う気も、あなたたちの相手をする気もありません。僕たちは何も悪くないじゃないですか。あなたが勝手にぶつかってきて、言いがかりをつけてるだけじゃないですか。今から警察に電話して事情を説明します。矢田君、警察に電話してくれ」

将が言った警察という言葉に、一瞬ひるんだ男たちだったが、問答無用とばかりに矢田の襟首を掴むと電話を取り上げようとした。そのとき将の右手が、襟首を掴んでいる男の手首を掴んだ。

「ほう、おいお前ら、この兄さんが相手になるそうだから、ちょっとばかり可愛がってやれ」

二人の男はボクシングの構えをすると、将の顔面めがけてパンチを放ってきた。空手で鍛え上げた将には、ずいぶん遅いパンチに見える。それに加えて、ソウルワールドに行くようになってから、桁

違いに身体能力が高まっていた。
男のパンチをかわした将は、電光石火の後ろ回し蹴りを放った。凄まじいスピードだ。プロの格闘家と言えど、かわすのは無理と思えるほどの早さだった。蹴りは一人の男のこめかみにヒットした。当たる瞬間、将は力を抜いていた。それでも男は気を失った。
たぶん失神した男は、あとで気がついても何が起きたのか思い出せないだろう。それほどの高速の蹴りだった。

次の男が躊躇しながら殴りかかってきた。裏拳でその手を払いのけると、今度は左の回し蹴りを至近距離から放った。百八十度近く開いた左足が、男の髪の毛を引きちぎるかのような勢いで、頭部をかすめた。将は、回し蹴りをわざと外したのだ。
一瞬の出来事に男たちはパニックになっていた。空手のファイティングポーズを取った将は、男たちにはとてつもなく大きく見える。それほどの威圧感があった。
倒れた男を二人で担ぐと、何も言わずにそのまま早足で去っていった。矢田たち四人は、将を驚嘆の眼で見ていた。彩子だけは将の強さを知っていたので、絡まれてもまったく恐怖心はなかった。

「また変な奴らに絡まれると嫌だから、早く帰ろうよ」
将の意見に、矢田たち四人は声を出さずに頷いた。

第2章　赤井刑事と一本の髪の毛

八月の初旬、将を訪ねて刑事がやってきた。将が空手の練習に行っていて留守のときだ。応対に出た母親の直美は、心臓の止まる思いだった。刑事は赤井と名乗った。

「刑事さん、将が何か事件でも起こしたんでしょか？」
不安な表情で尋ねた直美に、刑事は優しい口調で答えた。

「お母さん、ビックリさせてしまってすみません。聞き込み調査をしてるだけです。お宅の息子さんは何もしてませんから安心してください。息子さんは留守ですか？」
「はい、近所の空手の道場に練習に行ってるんです。帰ってくるのは五時半ごろになりますが・・」

それから二日後、今度は赤井刑事が彩子の家を訪ねてきた。応対に出た母親の恵子は、将の母親の直美と同じように不安になった。
「刑事さん、うちの娘が何かしたんでしょうか？」
「いいえ、何もしてませんから安心してください。ただの聞き込み調査です」
恵子はほっとすると彩子を呼びに言った。彩子が玄関に出てくると、赤井は警察手帳を見せながら名前を名乗った。
彩子の見たところ、赤井は四十代後半に見える。身長はマサルと同じぐらいで体格も似ている。優しそうな顔をしているが、獲物を追い詰めるような目は、刑事特有のように感じた。

「私は中瀬くんが、何か特殊な能力を持ってると思ってるんだけど、君は彼がそんな力というか、手品みたいなことをしたのを見たことはないの？」

「マサルくんは、空手は強いです。でも手品なんかまったく興味持ってません。それに、手先は器用じゃないです」
「いや、手品の話はたとえで、彼が超能力でモノを動かしたとか、そんなところを見たことはないの？」
「ないです。もしマサルくんが超能力者だったら凄いですよね！でも私、そんなことは一度も聞いたことありません」
「ありがとう。また寄らせてもらうかも知れないけど、そのときは協力してください」

翌日の午前十時に、赤井刑事が再び将を訪ねてきた。将の母親の直美から、午後からは空手の練習と聞いていたので午前中に来たのだ。

「将君、ちょっと出かけて話をしないか。マクドナルドでも奢るよ。時間あるかな？」
「はい、大丈夫です」
二人は赤井のクルマで、近くのマクドナルドへ向かった。
「十時半だから、昼食には早いけど、育ち盛りだからいくらでも食べれるだろう？　遠慮しないで注文していいよ」
「ありがとうございます」
将はハンバーガーを二つと、オレンジジュース、フライドポテトを頼んだ。赤井はアイスコーヒーを頼んだ。
「羨ましい食欲だなぁ。また昼ごはんを食べるんだろう？」
「はい」
将は旺盛な食欲を見せた。赤井は将の食べっぷりを、感心しながら眺めている。将がハンバーガーを一個食べ終わったところで、赤井が本題を切り出した。
「ところで将君、きみの将来の夢は何？」
食べるのを一旦やめて、将が返事をした。

「まだ分からないです。何をやりたいのかも、何が好きなのかも漠然としてて分からないです。赤井さんはどうして刑事になったんですか？」
「一言で言えば、悪人成敗！」
「正義感が強かったんですね。でも刑事の仕事だと、奥さんや子供さんは心配するんじゃないですか？」
「女房と子供は殺されたよ」
「えっ！　そうですか。すみません、余計なことを聞いて・・・。それで犯人は捕まったんですか？」
「俺は署内で赤鬼と呼ばれてるんだ。どういう意味か分かるかな？」
「いいえ、分かりません。教えてください」

赤井は視線を遠くに向けると、過去を思い出すかのように喋り始めた。それは赤井が結婚して六年経ったときだった。結婚した翌年に長男が産まれ、親子三人で仲良く暮らしていた。赤井は子煩悩で、帰宅すると寝るまで息子と遊ぶ毎日だった。息子も母親よりも、赤井になついていた。

息子が六歳になったときだ。妻の和江と息子の健太が外出しているときに、ピッキングでドアを開けて、空き巣が入っていたのだ。運悪く帰宅した和江と健太は、タンスの引き出しを開けて物色している空き巣と、鉢合わせしてしまった。空き巣は和江の首に扇風機のコードを巻きつけ殺害し、健太の首は両手で絞めて殺したのだった。和江が激しく抵抗したらしく、灰皿や本などが散乱していた。健太の顔には涙の跡があった。

2―2

帰宅した赤井が第一発見者だった。すぐに鑑識が呼ばれ現場検証を行ったが、手がかりはまったくなかった。唯一、犯人のものと思われる毛髪が見つかったが、それを手がかりに犯人を捜すのは不可能だった。

赤井は毎日遅くまで聞き込み調査を続けたが、不審な人物や不審なクルマを目撃したという情報は皆無だった。手がかりのないまま、十五年が過ぎていた。

そのときから赤井は、殺人事件に関しては、犯人を見つけるのに執念の鬼となった。犯人を見つけて逮捕するときは、傷害事件になる寸前まで痛めつけた。

その姿は、まさに鬼だった。

それから仲間内では、鬼の赤井。赤鬼と呼ばれるようになった。和江と健太の殺害から十五年が経っていたが、赤井は諦めていない。何としても犯人を捕まえたかった。犯人を捕まえるには、聞き込み調査するしかない。何も手がかりとなるものが残されていなかったからだ。

正直なところ赤井は捜査に限界を感じていた。今のままでは犯人を捕まえることは出来ないと思っている。年月が経つごとに、人の記憶は薄れていくものだからだ。

そんなとき、神様の奇跡という新聞の記事が目に止まった。癌が完治したという出来事は、まさに奇跡としか思えない。それは名古屋での出来事だったが、日本中で同じことが起きた。常識では考えられないことだ。

それからしばらくして、今度は落下してきた鉄パイプが空中で停止するという不思議な出来事が起きた。これも名古屋だ。この出来

事はたくさんの目撃者がいて、携帯電話のカメラで現場を撮影したものが多数いた。赤井は新聞者に寄せられた何百枚という写真を、一枚一枚、念入りに調べていった。その結果、赤井の長年の刑事としての勘から、将が二つの出来事に絡んでいると思ったのだ。

もし、超能力と呼ばれるものが存在するのであれば、妻と子供を殺害した犯人を見つけるのに力を借りたい。赤井の願いはそれだけだ。

赤井の話を聞きながら、将はテレパシーで赤井の本心を読んでいたが、話している内容とまったく同じだった。赤井は信用できると判断した将は話を聞き終えると、ひと言ひと言、言葉を選ぶように話し始めた。

「愛する家族を殺された赤井さんの心情は、僕が軽々しく口には出来ないと思います。僕を探していた理由は、良く分かりました。僕で良ければ力になりますが、二つだけ条件があります」

「言ってみてくれ。何でもするよ」

「一つ目の条件ですが、今から話すことと僕が見せる能力は、たとえ誰であろうと絶対に漏らさないということ」

「俺を信用してくれ！　絶対に二人だけの秘密にしておくから。二つ目の条件を言ってくれ」

「これはもっと大事です。もうひとつハンバーガーを頼んでもいいですか？」

「ワッハッハッハ、将君はいいキャラクター持ってるね！　気に入ったぞ。十個でも二十個でも好きなだけ食べてくれ」

将はハンバーガー四個を平らげると、赤井のクルマで近くの公園へと向かった。公園の駐車場にクルマを停めると、将は赤井に自分の能力について話し始めた。

「赤井さん、さっき言ったように、今から話すことと、今から見せ

ることは絶対に漏らさないでください」
「大丈夫だ！　信じてくれ」
赤井の表情を見ていると、テレパシーで頭の中を読む必要はなかった。
「僕の超能力は三つあります」
赤井が、ゴクリと唾を飲み込む音が聞こえた。
「手を触れずに物を動かす念力、一瞬で移動するテレポート、人の考えを読むテレパシー。この三つです」
淡々と話す将に、赤井はまだ超能力を見ていないのに、驚愕の視線を送った。

「もしかしたら、俺が話していたときに、頭の中を読んだのか？」
「失礼だとは思いましたが、赤井さんが本当に信用できる人かどうか、読ませてもらいました」
「それでどうだった？」
「信用できると思ったから、こうして全てを話しているんです」
「ありがとう！　心から感謝するよ」
「では早速、超能力を見せます。まず念力からです。次にテレポート、それからテレパシーを見せます」
言い終わった将は、順番に超能力を見せていった。

「あっ・・・、え・・・」

赤井は声にならない自分の声にもどかしさを感じながら、必死で考えをまとめていた。落ち着きを取り戻した赤井は、今の心境を口に出した。
「凄い！　素晴らしい！」
これ以上の言葉は必要なかったし、思いつかない。
「将君、俺は愛知県警本部の刑事課にいるから、いつでも会いに来てくれ。赤鬼さん居ますか？　って言ってくれれば通じるから。そ

れから、俺もまた会いに来てもいいかな？」
「もちろんです。ご家族を殺した犯人を一緒に探しましょう！」
「ありがとう、将君」
「何でも言ってください、力になりますから。それともうひとつ、まだ見せてない能力があるんですけど、見せましょうか？」
「まだあるのか！　ぜひ、見せてくれ」
赤井は、将の底知れない不思議な力に心底驚いていた。

「ではやります。超能力ではありません。空手です」
将は空手のポーズを取ったかと思うと、素早く動き始めた。そのあまりの速さに赤井は度肝を抜かれた。常人とは思えないスピードだ。回し蹴り、後ろ回し蹴り、前蹴り、突き、肘打ち、膝蹴り、飛び蹴り、そのどれもが凄まじいスピードだ。赤井が知る限りでは、将の攻撃をかわせるものはいない。プロの格闘家と比べても桁違いのスピードだ。
「将君、どんな練習をしたら、そんなスピードが出るようになるんだ？」
「練習じゃありません。ソウルワールドに行くようになってから、肉体の能力も桁違いにアップしたんです。理由は分かりません」
「百メートルは何秒で走れる？」
「まだ測ったことはありませんが、感覚で言えば、五秒ぐらいで走れると思います」
なんという少年だ。一体この少年の能力は、どこまで伸びるんだ！　赤井は、やっとの思いで興奮を抑えながら、独り言を呟いた。

2―3

将は自分の部屋で考えていた。将は辛かった。これほどの能力を持っていながら、赤井の期待に全く応えることが出来ないからだ。赤井の思いは痛いほど分かっている。分かっているからこそ辛い。俺の能力は一体何なんだ！　一人の人間の力にもなれないほど無力なものなのか！　将は悔しかった。何としても赤井の無念を晴らしたい。不思議なもので、必死で考えていると、解決策はあるとき突然閃くものだ。将はある仮説が浮かんだ。それは突然だった。

赤井の意識に潜り込んだ意識体の将は、赤井の妻の和江について調べ始めた。赤井の意識には、今も鮮明に和江と健太のことが残っている。意識体の将は、和江と健太の情報を調べた。赤井に残っている和江と健太の鮮烈な想い出の中に、必ず探しているものがあるはずだ。それはわずかだけあればいいのだ。

「あった！　見つけたぞ！」

意識体の将は探しているものを見つけた。それは消え入りそうなほど、僅かなものだった。注意して探さないと絶対に見つからないものだ。

将はある人の意識体を知ると、その人の居る場所を見つけることができる。それは、その　意識体が発するシグナルが分かるからだ。ただし、一度でもその意識体に接触しないと、シグナルを知ることはできないが、もしその人の想い出や記憶を鮮明に持っている人であれば、その記憶の中から意識体のシグナルが分かるのではないかと考え、和江のシグナルを探していたのだ。

シグナルが分かれば、その意識体を持った人を探すのは造作もない。時間と距離の概念がないソウルワールドからその意識体を探せば、過去であっても可能となるはずだ。シグナルは指紋のようなも

ので、同じシグナルは存在しない。だからシグナルで、どの意識体かが分かるのだ。

意識体の将はソウルワールドへ移動すると、赤井の記憶から得た和江のシグナルを探し始めた。和江は十五年前に亡くなっているので、ソウルワールドからでないと探せない。

和江の居場所を見つけた意識体の将は、その場所へ移動した。そこは和江が、犯人にコードで首を絞められている場面だった。十五年前の過去だ。

今であれば将にとって、和江を助けて犯人を捕まえるのは簡単なことだが、そうすると過去を変えることになるので、それは出来ない。目の前で人が殺されるのを見るのは、針のむしろに座らされている何倍、何十倍もの苦痛だ。

意識体の将は感情を殺すと、冷めた視線を犯人に送った。犯人の男は和江を殺したあと、隣で気を失っている健太の首に手をかけた。感情を殺していても悪魔ではない意識体の将は、健太が殺されるのまで見ることには耐えられない。

健太から視線を外した意識体の将は、涙を流していた。意識体から実際に涙が流れているのかは分からないが、意識体の将は号泣していた。涙の量に比例して犯人への怒りと憎悪が、加速度的に膨らんでいった。

意識体の将は犯人の意識に潜り込むと、犯人の全ての情報を記憶に収めた。目的を果たした意識体の将はソウルワールドへ移動し、自分の肉体へと戻った。時間は夜の十一時になっていた。将はベッドに潜り込むと、涙を流しながら眠りに就いた。

将は夢を見ていた。和江が男に電気コードで首を絞められていた。将は後ろから男の肩を掴むと、思いっきり後ろへ引っ張った。男はひっくり返ったが、すぐに起き上がると将に反撃してきた。将は和江の首に巻きついたコードを外しながら、襲いかかってきた犯人を

念力で停止させた。コードが外れると、和江はゼ～ゼ～と肩で大きく息をし、貪るように空気を吸い込んだ。

念力でそのまま男を捕まえれば済むことだが、将は男を許せなかった。念力を解くと、男が襲い掛かってきた。将は右の回し蹴りを男の上腕部に放った。手加減はしない。高速の回し蹴りを受けた男は、吹っ飛んで壁にぶつかった。左上腕部の骨が折れていた。苦痛に顔をゆがめながら、男は隠し持っていた刃渡り二十センチほどの刃物を取り出した。

刃物を持った右手を振り回しながら襲い掛かってきたが、将の目にはスローモーションのように見えていた。男が振り回す刃物を紙一重のところで巧みにかわしながら、反撃のチャンスをうかがっていた。それはまるで、ダンスでも踊っているかのような滑らかな動きだった。

刃物をかわすだけで攻撃してこない将に、男は勝機を得たと思った。その思いは表情にも表れていた。ニヤリと笑いながら刃物を振り回している男に、高速の左回し蹴りが放たれた。凄まじいスピードだ。蹴りが来ると分かっていても、避けることは不可能だ。

男の右上腕部に蹴りが当たると、男は壁に激突した。右上腕部の骨が折れていた。立ち上がって逃げようとする男の左太腿に、ローキックが叩き込まれた。もんどりうって倒れた男は、苦痛の表情を浮かべ逃げることを諦めた。手加減したキックだったが、大腿部の骨にはヒビが入っていた。和江は健太を抱きしめながら、涙を流して震えている。

将がしゃがんで二人を見ているときだった。倒れていた男が立ち上がると、近くにあった花瓶で、将の後頭部を思いっきり殴ったのだ。なぜ？　薄れていく意識の中で、将は自分に問いかけていた。油断大敵の言葉が聞こえた気がした。意識が戻った将の横には、コードを首に巻かれた和江と、涙を流した将が横たわっていた。

「ワァ〜！」

大声をあげて将は目を覚ました。

「夢か」

将は呟いたが、夢で良かったのかどうかは分からなかった。

2―4

翌朝九時、将は赤井に電話をかけた。
「将です。おはようございます」
「おぉ、将君おはよう。こんな早くにどうした？　何かあったのか？」
「奥さんと息子さんを殺した男を見つけました」

将は電話を切ると、赤井の部屋へテレポートした。男は柳田竜二。当時三十五歳だった。十五年経った今は五十歳になっている。空き巣の常習犯だが、一度も逮捕されたことがなく、現場に証拠も残さないため、警察のリストには載っていない。

「将君、柳田のシグナルは分かるのか？」
「もちろんです！」
「ヤツを探すのを手伝ってくれないか」
「赤井さん、犯人を見つけたとして、どうやって逮捕するんですか？　十五年も経ってるし、証拠がないですよ」
「逮捕はしない」
「えっ？　どうするんですか？」
「和江と健太を殺したように、ヤツの首を絞めて殺してやる！」
赤井は鬼の形相で言った。
「そんなことをしたら、赤井さんが殺人犯になってしまいます」
「和江と健太の仇を討てるんだったら、それでも構わんさ」
「そんなことをして、和江さんと健太くんは喜びますか？　赤井さんにはこれからも犯罪者を捕まえるという使命があるじゃないですか！　僕と一緒に正義のために闘いましょう」

将の言葉に、赤井の表情が緩んでいった。

「すまん。つい感情的になってしまった。君の言うとおりだ。将君、俺に考えがあるから逮捕できるよ」
赤井は、部屋から発見された唯一の手がかりの毛髪があることを思い出した。
「将君、悪いけど早速、柳田を探してくれないか」
「今から幽体離脱するので、赤井さんはここで僕を見ててください」
横になった将は、一分弱で幽体離脱した。過去の和江を探すのと違って、現在生きている柳田を探すには、ソウルワールドへ行く必要はない。意識体の将は、レーダーのように意識を北海道から南へ放ちながら、柳田を探し始めた。
意識が広島に来たときだ。意識体の将は、柳田の発するシグナルを感知した。瞬時にそこへと移動すると、柳田の姿を発見した。五十歳の柳田は白髪交じりの頭髪が少し薄くなりかけていて、実際の年齢よりも老けて見える。

意識体の将は柳田の意識に潜り込んだ。柳田の意識の底には、和江と健太を絞め殺した記憶が残っていた。和江と健太を殺した後、柳田は空き巣から足を洗い、鉄工所勤めの普通のサラリーマンになっていた。
柳田は二人を殺した後、東京へ逃げていた。指紋も、手がかりになるような証拠も残していない自信はあったが、テレビのニュースや新聞記事を見ながら、怯えて暮らしていた。
それも一年だけだった。和江と健太殺しの事件は、一年過ぎると風化していた。もう見つかる心配はないと判断した柳田は、名古屋に戻ってきて派遣社員として働いたが、仕事に馴染めず、故郷の広島へ帰ることにしたのだ。
広島に帰った柳田は、友達の紹介で現在の鉄工所に勤めることになった。あの事件以来、空き巣からは完全に足を洗っており、勤務態度も真面目で社内での評価は良い。
柳田には奈美子という三歳下の女房がおり、子供は今年中学二年

になる大輝と、小学六年の美由紀の二人だ。

意識体の将は肉体に戻った。目を開けて起き上がった将は赤井に伝えた。

「赤井さん、柳田は広島にいます」

将はテレパシーで柳田の情報を伝えた。赤井は悩んだ。柳田を見つけて、すぐにでも首を絞めて殺してやりたいが、柳田には家族が居る。子供も二人いる。

柳田の過去を知らない家族にとっては、いいお父さんに違いない。柳田の家族の心情を考えると辛い。もちろん、殺すつもりはない。家族にとっていいお父さんかもしれないが、犯した罪は償わないといけない。将はテレパシーを使わなくても、赤井の悩んでいることが手に取るように分かった。

「赤井さん、罪を犯した者は法で裁かれるべきですよ。日本は法治国家だし、赤井さんたちもそのために働いてるんでしょう？」

「そうだよな。将君、俺は今から広島へ行くよ」

2―5

赤井が広島に着いたのは、午後一時半頃だった。将に連絡した赤井は、広島駅のトイレにテレポートした将と合流した。

「赤井さん、鉄工所の場所は分かりますか？」

「ああ、大丈夫だ。ここから広島電鉄で十五分の袋町だから」

テレポートすれば一瞬で移動できるのだが、全てを将の能力に頼ってしまうと、刑事としての勘が鈍ってしまうような気がした赤井は、電車で行って、歩くことにした。これが刑事本来の捜査のやり方だ。

鉄工所に着いた赤井と将は、事務所に入ると柳田を呼んでもらった。中学校の同級生ということにした。

五分も経たないうちに作業着姿の柳田が現れた。作業帽を脱いで軽く会釈をすると、受付のテーブル席に座っている赤井と将の前の椅子に座った。少し、警戒したような表情を見せると、おもむろに口を開いた。

「あのう、柳田ですが、どちらさまですか？」

柳田は受付の女性から中学校の同級生と聞いていたが、赤井の顔はまったく記憶にない。

「初めまして柳田さん。私は赤井と申します。こっちは息子の将です。ちょっと聞きたいことがあって、名古屋から来ました」

柳田の表情が一瞬曇った。将は柳田が現れたときからテレパシーで柳田の心を読んでいる。赤井という名前を聞き、柳田の脳裏に和江と健太殺しの記憶がまざまざと浮かび上がってきた。赤井は柳田の額から汗が流れ始めたのを、見逃さなかった。柳田は明らかに動

揺している。テレパシーを使わなくても、赤井には分かっていた。刑事の鋭い観察力は、犯人の微妙な変化も見逃さない。

「柳田さんどうしました？　何か心配事でもあるんですか？」

「いえ別に・・。赤井さん私に聞きたいこととは何ですか？」

柳田は動揺を見せまいと、平静を装いながら尋ねた。

「もう十五年前になるんですが、名古屋で主婦と六歳の男の子が自宅で殺されるという事件がありました。ご存知ですか？」

「さぁ、私はここに居たんで、そんな事件があったかどうか記憶にありませんが・・」

将には、柳田がウソをついているのは分かっていたが、黙って様子を見ることにした。

「そうですかぁ。実は私は名古屋の刑事なんですが、殺された主婦は私の女房なんです。男の子は私の長男です」

柳田は素人目にも分かるほど動揺していたが、したたかだった。

「それはお気の毒でした。それで私に聞きたいこととは？」

赤井は鋭い視線を柳田に向けると、いきなり核心に触れる質問を浴びせた。

「柳田さん、犯人について何か存知じゃないですか？」

「どうして私が知ってるんですか？　私はずっとここで暮らしてるんですよ。まして名古屋に行ったこともありません。私を疑ってるんですか？　非常に不愉快です」

柳田には十五年経った今、絶対に捕まらないという自信があった。自分ですら記憶が薄れ掛けているのに、証拠も何もないのに逮捕できるわけがない。

「すみません。気分を害することを言ってしまって。刑事の習性と

思って勘弁してください」
赤井は頭を下げると、柳田が被っていた帽子を手に取った。しみじみと過去を振返るような仕草をしながら、帽子を触った。
「私の父親も昔、鉄工所で働いていました。最近、景気のほうはどうですか？」
赤井は世間話をするかのように見せかけて、帽子に付着していた白髪をばれないように手に隠した。
「ぼちぼちといった所です。私もあと十年で定年ですから、それまで景気が悪くならなければと思ってます。うちみたいな小さい会社は、景気が悪くなるとすぐに倒産する可能性がありますからね」
少し雑談をしたあと、
「貴重な時間を済みませんでした。これで帰ります」
赤井と将は頭を下げると、鉄工所を後にした。将は柳田が赤井に向かって、「ばかやろう！　間抜けな刑事。一生一人で苦しんでろ」と心の中で叫んでいるのをテレパシーで聞いていた。

一週間後、赤井から将の携帯電話に連絡が入った。
「現場に残ってた髪の毛と、柳田から採取した髪の毛のＤＮＡが一致したぞ！　これで証拠が揃った。柳田を逮捕できる」
「やりましたね赤井さん！　これで奥さんと息子さんも浮かばれますね」
「今から逮捕しに行ってくるよ。広島県警には連絡してあるから、俺が着くころには逮捕されてると思う」

柳田は逮捕され裁判が行われた。初公判で柳田は、赤井和江と健太の殺害を認めたが、殺すつもりはなく、騒がれたため怖くなり首を絞めてしまったと供述した。
検察側は死刑を求刑したが、弁護側は計画的犯行ではなく、殺害の意思がなかったことを取り上げ反論した。裁判は長期化しそうな

様子だ。どんな判決になろうとも、赤井は法の裁きに任せることにしていた。和江も健太もそれを望んでいると思ったからだ。

第3章　サイレント・パニッシャー

飲酒運転、万引き、下着泥棒など、このところ警察の不祥事が続いていたが、その中のひとつに、警察の信頼を失墜させる、愛知県東海市で起きたストーカー事件があった。ストーカーにあっているという女性が助けを求めてきたにも関わらず、警察の怠慢により、その女性が殺害されてしまったのだ。

マスコミはその事件を大々的に取り上げ、警察の弁解じみた会見は、印象を悪くするだけだった。警察にも言い分があるだろうが、世論を敵に回したら勝ち目はない。

被害者の家族の気持ちは痛いほど分かっている赤井だが、警察にも限界があることはどうしようもない。言い方は悪いが、起きてしまったことをいくら悔やんでも仕方がない。今は一分一秒でも早く犯人を捕まえ、被害者の無念を晴らしてやりたかった。

高校生になって初めての夏休みも終わり、九月半ばのある日、将の携帯電話の着信音が鳴った。着信音は最近の流行の曲だ。ディスプレイには赤鬼と表示されている。

「はいマサルです。こんにちは赤鬼さん。何かあったんですか？」

「実は折り入って、お願いがあるんだが・・」

「遠慮しないで言ってください。僕に出来ることだったらやりますよ」

赤井は電話の向こうで言いにくそうに口ごもっていたが、将の言葉に意を決したかのように言った。

「君も知ってると思うけど、ついこの前、愛知県東海市で、女性がストーカーに殺された事件があったよな。それと似たようなことが起きようとしてるんだ」

「誰か助けを求めてきたんですか？」

「そうなんだ。ある女性が、ストーカーされてて怖いから、守って欲しいと護衛を依頼してきたんだ。気持ちは分かるんだけど、個人の護衛のために警察が二十四時間張り付くというのは出来ないんだ」
「それで僕に護衛を頼めないかということで、電話したんですね？」
「事件が起きてからだと手遅れということも考えられるし、そうかと言って、毎日個人のボディーガードをすることは出来ないんだ。しかし先日のストーカー事件の殺人のこともあるし・・」
「分かりました。明日にでも、その女性に会わせてもらえますか？
彼女が怯えているんだったら早いほうがいいですから。それから、くれぐれも僕のことは内緒にしておいてください」
「分かった。そしたら明日、彼女が改札口から出てきたところで接触するから、君も改札口で一緒に待っててくれないか」

翌日、名鉄の尾張旭駅改札口の近くで赤井は女性を待っていた。赤井から少し距離を置いて将と彩子がいる。赤井は、ある女性が改札口から出てきたのを確認すると、ゆっくりと近づいていった。

「すみません刑事さん。アパートまで二十分なんですけど、いつも誰かに付けられてるような気がして、とても怖いんです」
「原田さん。そのストーカーというのは男ですか、女ですか？」
「たぶん、男だと思います」
「思います。と言うのは、ストーカーを見てないんですか？」
「はい。見てないんですけど、確かに私を付けて来ているんです。間違いありません。男の人の気配を感じるんです。見えないから余計に怖いんです」

赤井は歩きながら、半ば呆れていた。確かにストーカーに殺害された女性は、警察の怠慢の結果だと言わざるを得ない。だが見てもいないストーカーに怯える女性の警護までしていたら、それこそ女性の数だけの警官が必要になる。

赤井は美由紀のことを、被害妄想の女性ではないかと思った。気配を感じると言うだけで、一度もストーカーの姿を見ていないのだ。これ以上、貴重な時間を美由紀のために使うつもりはない。
そう思っているところへ、将がテレパシーで話しかけてきた。赤井は自分の思っていることを将に告げた。と言っても、考えるだけで瞬時に伝わるので、時間的には数秒もかからない。

「赤井さん分かりました。後は僕に任せてください。でも今は、原田さんを無事にアパートまで送ってください」
将は赤井から聞いたことを彩子に話した。
「赤井さんは、原田さんを被害妄想だと言ってるけど、彩ちゃんはどう思う？」
「女性の立場から言ったら不安で仕方ないわ。誰かと一緒に帰るんだったらまだしも、毎晩一人でしょう。それに女性の第六感ってバカに出来ないわよ」
彩子と話しながら歩いていると、ほどなく美由紀のアパートに着いた。アパートを確認した将は、一旦、家に帰って出直すことにした。これから先は、彩子が居ないほうがやりやすいからだ。

帰宅した将は手早く夕食を済ませると自分の部屋へ行き、幽体離脱を始めた。一分弱で離脱した意識体の将は、美由紀の意識に潜り込んだ。彼女のソウルノートを見るためだ。ソウルノートにストーカーのことは書かれていない。そうは言っても、人生で起きることの全てがソウルノートに書かれているわけではない。
将は、美由紀が赤井に話したことが本当かどうかを調べた。美由紀は見えない影に怯えていた。その影とはストーカーだ。姿は見てないが、確かに美由紀は、ストーカーとおぼしき気配を感じていた。

意識体の将は美由紀のシグナルを記憶すると、自分の部屋へと戻り、眠っている肉体に戻った。幽体離脱してから戻るまで、五秒も

かかっていない。
原田美由紀は毎日、同じ時間の電車で帰っている。名鉄尾張旭駅に着くのが午後八時十五分。駅からアパートまでは徒歩になる。平池の前の民家の通りを抜け、約一キロの距離を歩く。
街路灯は点いているが、人通りの少ない道は決して安全とは言えない。それに加えてこの二ヶ月ほど前から、美由紀は誰かに尾行されてるような気配を感じていた。不安は募るばかりだ。そんな矢先、ニュースでストーカー殺人を知った美由紀は、居ても立ってもいられず、警察に保護を求めたのだ。被害者は、美由紀と同じ愛知県に住む女性だった。

原田美由紀は二十四歳。名古屋のブティックに勤めており、終業時間が遅いこともあって帰宅も遅い時間となっている。親元を離れたアパートでの一人暮らしだ。中学高校と陸上部に所属していた美由紀は、脚力には自信がある。いざとなったら走って逃げれば大丈夫だろうと漠然と思っているが、ふいに襲われた場合を考えると、その自信も揺らいだ。

3―2

将が美由紀を護衛し始めて五日目の夜だ。いつものように帰宅の途についていた美由紀が背後に人の気配を感じ、振り向いた瞬間だった。黒っぽいジャージーを着て野球帽とマスクで顔を隠した男が、三メートルほどの距離から襲い掛かってきた。

手には刃渡り三十センチほどの包丁が握られている。ストーカーではなく、通り魔だ。美由紀は出せる限りの悲鳴をあげた。自慢の脚力を使って逃げることは、頭から消えている。悲鳴が助けてくれると思っていたが、不運なことに周りに美由紀と通り魔以外の人影はない。

通り魔が美由紀を刺すのに十秒も必要ない。包丁を持った右手が振り下ろされた。美由紀は悲鳴をあげながら死を覚悟した。通り魔の振り下ろす包丁が、まるでスローモーションのようにゆっくりと迫ってくる。

包丁が二十センチの距離まで迫ったときだ。美由紀の左手が勝手に動き、包丁を握った右腕を払いのけた。その後は他人に操られているように、勝手に身体が動いていた。美由紀はまるで夢を見ているようだった。

右手の手刀を通り魔の首筋に叩き込むと、右回し蹴りをこめかみに放った。充分な手応えだったが、身体はなおも動き続けた。通り魔が崩れ落ちようとしているところへ、追い討ちをかけるように左の後ろ回し蹴りが叩き込まれた。

その一連の動きは空手の達人並みの速さで、とうてい素人が避けきれるものではない。十秒もかからず通り魔は気を失って倒れた。美由紀は何がどうなったのか、まったく理解できなかったが、意識体の将が美由紀の身体を操っていたのだ。空手の達人であり並外れ

たスピードを持つ将の技が、そのまま美由紀の動きとなっていたのだ。

美由紀はすぐに警察に電話をすると、十分ほどで警官が到着し、通り魔は現行犯で逮捕された。美由紀も事情聴取のために、警察へ同行することになった。

通り魔の名前は森田秀則。年齢三十五歳。ある県立高校の国語の教師だ。既婚者で、二人の子供と奥さんの四人家族だ。美由紀とは面識がなく、なぜ自分が彼女を襲ったのか全く分からないし、覚えていないと繰り返すばかりだ。

翌日の朝刊に、通り魔殺人犯逮捕の記事が載っていた。テレビレポーターの質問に、森田を知る教職員や父兄は口を揃えて、信じられないということを言っていた。
将は森田の意識に入ってみたが、森田は父兄の評判どおりの人物で、真面目で明るく、とても通り魔殺人をやるような人間ではない。将自身、今回の森田の行動が腑に落ちない。

「何か変よね。マサルくんが覗いてみた犯人の素顔は、犯罪を犯すような人じゃなかったわけでしょう？　薬物とかアルコールが入ってたとか、精神的な病気とかじゃなかったのかしら？」
「赤井さんから聞いた限りでは、警察もその辺のところは念入りに調べたそうだけど、まったく異常はなかったそうだよ」
「まるで、マサルくんが原田さんの身体を操ってたみたいに、森田さんも誰かに操られていたような感じよね。でも結果は犯罪を犯したわけだから弁解の余地はないし、こうなると森田さんの人生は崩壊することになるわ。家族が可愛そうね」

彩子の言うとおりだ。森田自身が犯罪を犯した理由は分からない

のだが、結果的に、森田の人生が崩壊するのは事実だ。
　将が見た美由紀と森田のソウルノートには、通り魔事件のことは書かれていない。このこと自体も将には奇妙だった。人生で起きる全てのことが、ソウルノートに書かれているわけではないが、命に関わることや、人生に大きな影響を与えることが書かれてないわけはないからだ。ただ、予想外の外乱によって生ずることまでは書かれていないので、今回の事件もそうだろうと思った。

3―3

十一月に入り、季節は冬へと駆け足で向かっている。千葉の県立高校に通う島崎香織は、授業中に気分が悪くなった。朝から少し熱っぽかったので、風邪を引いたのだろうと思い、担任の許可を得て保健室で休むことにした。

保健室には養護教師の奥村がいた。奥村は四十代半ばの女性教諭だ。症状を話した香織は、奥村に言われてベッドで休むことにした。ベッドに横になった香織は五分ほどするとウトウトし、寝息を立て始めた。香織の様子を見ていた奥村が、用事を思い出し保健室から出て行くと、そのときを待っていたかのように一人の男が入ってきた。

男は香織のベッドに近づくと掛けられていた毛布をめくり、スカートの中に手を入れた。香織は下半身を触られている感覚に目が覚めたが、一瞬、何が起きているのか分からなかった。

香織が目を覚ましてから、時間的には十秒も経っていなかった。目の前にいる男の姿に、香織は甲高い悲鳴をあげた。香織の上に乗っていた男は咄嗟に香織の口を塞いだが、悲鳴はすでに保健室の外に響いた後だった。

悲鳴を聞きつけた体育教師の桜井が、壊れるほどの勢いでドアを開けて飛び込んできた。桜井は香織に乗っている男を背後から掴むと、力ずくで床にねじ伏せた。柔道四段の桜井に押さえつけられた男は、身動きすることも出来ず観念したのか、グッタリとなった。男の腕を背後に決めて尻餅をつかせた状態にした桜井は、男の顔を見て驚きの声をあげた。

「村中先生じゃないですか！　一体どうしたんですか！」

男は英語教師の村中だ。桜井は決めていた腕を放して村中を自由にしたが、村中は肩を落とし、下を向いたままじっとしている。それから一分も経たないうちに、他の教師と生徒が保健室へ駆け込んできた。桜井は村中と香織を職員室へ行くように促した。

「さあさあ何でもないから、皆、教室へ戻りなさい」

桜井の言葉に生徒たちは口々に不満を言いながら、教室へと戻っていった。

職員室へ入った村中と香織に、校長と教頭が説明を求めた。桜井が口火を切り、悲鳴から村中を取り押さえたところまでを説明した。

「島崎さん、なぜ悲鳴をあげたんですか？」

校長の質問に声を詰まらせ、涙をこぼしながら香織が答えた。香織は村中の行為に、ひどいショックを受けている。

「気分が悪くなって保健室のベッドで休んでいたら、いつの間にか眠ってしまったんです。しばらくして、太腿を触られているような気がして目が覚めたら、村中先生が上に乗って、スカートの中に手を入れていたんです。それでビックリして悲鳴をあげたら口を塞がれ、そのときに桜井先生が飛び込んできて助けてくれたんです」

校長、教頭、桜井には、香織の言ったことが信じられない。なぜなら、村中は真面目で明るく教育熱心で、曲がったことが大嫌いな性格だからだ。

「村中先生、島崎さんの言ったことは本当ですか？」

教頭が信じられないと言った表情で聞いた。

「はい。間違いありません。島崎さんの言ったとおりです」

村中はヒザの上に両手を置き、うなだれたまま小さな声で答えた。

「なぜそんなバカなことをしたんですか！　これは犯罪ですよ！」

校長は語気を荒げ、子供を叱るような口調で怒鳴った。
「なぜこんなことをしたのか自分でも分からないんです。島崎さんを乱暴しようとしたのは事実ですが、なぜなのか分からないんです」
「そんなバカな！　自分でやっておきながら分からないなんて・・。とにかくこのまま済ますわけにはいかないので、警察を呼ぶことにします」
校長の言葉に村中は、自分の人生が崩れ落ちていくのを感じた。女房と二人の子供の人生も狂わすことになるだろうという思いと共に。

3―4

大手商社勤務の藤島信也は、大阪支店の営業一部に配属されて、食品や半導体関連など内陸の客先を担当していた。入社して五年が過ぎた今年、四月の人事異動で営業二部への配属となった。営業二部は、コンビナートの客先を担当する部署だ。

藤島は今年二十七歳になる。三十歳までには結婚しようと漠然と考えているが、交際している女性はいない。内陸の客先担当のときは、その明るく人見知りをしない性格が客先に気に入られ、毎年、売上予算を達成していた。

営業二部に配属された当初は、今までと違う業種の客先に興味がわき、やる気満々だったが、半年経った今は、そのときの勢いは見る影もなくなっている。

心配した上司の山田が時々声を掛けて元気付けてはいたが、まったく効果はない。山田が理由を聞いても、大丈夫ですからと答えるだけだ。

営業一部のときの元気ハツラツとした面影はなく、傍から見ていると鬱病のように見える。口数も少なくなり、藤島の取り柄が明るい性格だと言っても、今の彼を見たら誰も信用しないだろう。

藤島の元気のない原因は、藤島が担当している大手A社の石井にあった。購買課長の石井は、A社という虎の威を借る狐なのだ。何処にでもこの手の人間はいるものだが、石井の場合は度を越している。

仕入れ業者に対する口の利き方や態度は横柄そのもので、社内での評判も悪いが、誰も注意する者はいない。二十代と若い藤島は、石井から完全になめられており、石井のストレス解消の標的となっているとしか思えないほど、徹底的にいたぶられていた。

藤島がアポの時間を指定して面会に行っても、三十分ぐらい待たされるのは日常茶飯事で、待たされた挙句、今日は都合が悪いから帰れと言われることも、度々ある。見積書にしてもベスト価格を書いて来いと言われ、これ以下の金額だと赤字になるという価格を書いて行ったところ、その価格からさらに大幅な値引きを要求され、結局赤字で受注し始末書を書いたこともあった。

こんな状況のため売り上げは増えても利益はほとんど出ず、藤島の社内での評価は悪くなる一方だ。

あるネゴ交渉のとき、石井から提示された価格だと赤字になるため、その価格での注文を辞退したところ、辞退するのなら今後お前の会社との取引は無しにすると、脅されたことがあった。Ａ社という大手企業のバイイングパワーの前に泣く泣く赤字で受注してしまった藤島は、またしても始末書を書く羽目になってしまった。

藤島は、上司の山田が元気付けようと声をかけてくるのも好きではない。なぜなら、自分の悩みを山田は知っているからだ。その割に山田は、元気出せ。悩みがあったら相談しろ。という言葉しか掛けて来ず、始末書を提出するときは責任追及するだけで、何ら解決策を言ってくれたことは一度もない。

今のままでは苦痛の日々という想いしかない。出来ればＡ社から担当を外して欲しかったが、一番の解決策は石井がいなくなることだ。

そんな矢先、購買課長の石井が逮捕されるという事件が発生した。石井は自宅から会社までマイカー通勤をしている。事件当日、飲み会が予定されていたため、石井は電車とバスを乗り継いで出勤することにしていた。

朝自宅を出た石井は電車に乗ったが、車内はいつもの通り混んでいて座ることは出来ない。つり革に掴まることもできない石井は、

押されながら車内の中央まで来ていた。
　気がつくと石井の前に、二十歳半ばと思えるロングヘアーの女性が立っていた。石井に背中を向けており、彼女から石井の姿は見えない。石井はカバンも何も持っていなく両手は自由だ。

　電車が発車して間もなく、石井の右手が動いた。女性のコートに手を入れ、スカートの右側にあるジッパーをゆっくり下げると、右手を入れた。女性は振り向いて石井を見ようとしたが、混雑しているので振り向くことが出来ない。　一分ほど経ったとき、女性が石井の右腕を掴んで抑えたまま、声をあげた。

「痴漢よ！　この人痴漢よ！　誰か警察に連絡してください！」

　石井の後ろにいた若い男性が女性の声に石井を見てみると、石井の手は女性のコートの中に入っており、その手はしっかりと女性に握られている。

「この痴漢ヤロウ！　警察に突き出してやる」

　男性に背後から腕を取り押さえられた石井は、周りの乗客の視線も一斉に浴び、もはや観念したように首を垂れ、じっとしていた。石井の頭の中を、走馬灯のようにいろいろな想いが駆け巡った。石井には自分の人生が崩れていく音が聞こえていた。
　次の駅で男性に引きずり出された石井は、駆けつけた駅員に連れられ警察へ連行されることになった。事情聴取のため被害者の女性も同行した。警察へ連れて行かれた石井の取調べが始まった。

「あんた名前は？」
「石井孝之です」

「家族は？」
「女房と三人の子供が居ます」
「サラリーマンやろ？　どこの会社？」
「すみません。会社と家族には内緒にしてもらえないですか？」
石井の答えに業を煮やしたのか、被害者の女性が割り込んできた。女性は太田可奈子と名乗った。
「あなた何を自分勝手なこと言ってるの！　あなたは痴漢よ。犯罪者なのよ！犯罪を犯したんだから、新聞にもニュースにも出て当たり前じゃないの！　ふざけたこと言わないでよ」
可奈子は怒りを抑えようともせずに、スカートのジッパーを下げられ、石井の手が入ってきて下腹部を触られたことを話した。怒りに燃えた可奈子の目は、話しているあいだ石井を睨みつけていたが、石井は視線を逸らすように下を向いたままだ。
「太田さんが言うたことに間違いないな？」
「間違いありません」
警官の質問に、石井は蚊の泣くような声で答えた。
「なんで痴漢なんかしたんや？」
「分からないんです。こんなことしたら掴まることは誰でも分かるのに、なぜ痴漢をしたのか今考えても分からないんです」
石井は正直に答えたが、可奈子の怒りは収まらない。
「そんな馬鹿げた言い逃れをしても、あなたが痴漢をしたことは事実なのよ。私は許すつもりはありません」
石井は懲戒免職は免れないだろうと思った。なぜ痴漢をしてしま

ったのか、いくら考えても分からなかったが、痴漢をしたという事実を消すことはできない。いくら真実を言ったところで、誰にも信じてもらえるとは思えない。

決して順風満帆とは言えないが、今まで築き上げてきた生活と、今からの人生が音をたてて崩れていくのを感じていた。女房と三人の子供たちの悲しそうな顔とともに。

翌日の朝刊の三面記事に石井逮捕の記事が載っていた。自宅で出勤前にその記事を読んだ藤島は、思わずガッツポーズをしながら、やった！　と叫んだ。藤島は石井とは対照的に、これで自分の人生は好転すると確信したのだった。

3―5

「将君、今夜彩子ちゃんと一緒に俺の家に来ないか？　手料理をご馳走するよ」
「ありがとうございます。美味しい料理、期待してます。サイフの心配はしなくてもいいですよね？」
「アッハッハッハ。相変わらずとぼけた男だな、きみは。アッハッハッハ」

将と彩子はテレポートで赤井の部屋に現れた。二人がテレポートで来るのは分かっているのだが、突然目の前に現れた二人の姿に、赤井は危うく悲鳴をあげるところだった。
「百戦錬磨の赤鬼さんが、何をビックリしてるんですか」
「そう言うけどな、ビックリしないほうがおかしいぞ。やっぱりきみは凄いよ」

赤井は心底将の超能力に感心すると、鼻歌を歌いながら出来上がったばかりの料理を運び始めた。
赤井は料理が上手だ。身体が温まるようにと、今日の料理は鍋物だ。アルコールが入った赤井は上機嫌だ。将と彩子は話し上手の赤井の聞き役に回っていたが、彩子は気になっていることを赤井に聞いてみることにした。

「赤井さん、私、赤井さんと付き合うようになってから、いろいろな事件のことが気になるようになったんです。それで気になった事件の記事を切り抜いて、スクラップブックに貼ってるんですけど、面白いというか、あることに気がついたんですけど、見てもらえますか？」
彩子はそう言うと、持ってきたスクラップブックを広げた。それ

にはいろいろな記事が貼ってあったが、赤丸を付けてある記事が赤井の目を引いた。

「彩子ちゃん、今言った面白いことって、その赤丸の記事のこと？」

「そうです。この赤丸の事件には、ある共通した点があるんです。赤井さん、分かりますか？」

赤井は赤丸の記事を順番に見てみた。事件の内容は見なくても、タイトルだけでどんな事件かは全て知っている。

「尾張旭のストーカー通り魔事件、千葉の女生徒強姦未遂事件、堺市の痴漢事件、埼玉の母子殺害事件か・・」赤井は小さく呟くと、改めてこれらの事件について考えてみた。

「マサルくん分かる？　テレパシーで頭の中を見るのは反則だからね」

赤井と将は、あれでもない、これでもないと、ぶつぶつ言いながら考えていたが分からない。

「降参。まいった。分かりませ～ん。彩子刑事、教えてください」

「この赤丸の事件は、犯人が逮捕されて解決したかのように思われてるけど、私は解決していないと思うの。何故かと言うと、犯人の犯罪動機が不明というか、犯人自身が犯罪動機が分からないって言ってるわ。マサルくんが犯人の意識を覗いて確認してるから、言ってることはウソではないわ。これが事件の共通点で、本当の意味で事件を解決するキーワードだと思うの」

「素晴らしい！　着眼点が凄いよ。確かに彩子ちゃんの言うとおりだ。犯罪を犯したのは逮捕された連中だけど、犯罪動機を与えた奴は、どこかにいるな！そいつを捕まえない限りは、同じような犯罪が繰り返されるぞ」

「今回逮捕された犯罪者は鵜飼いの鵜で、本当の犯人は鵜を操って

いる鵜匠なんだ！　その鵜匠が事件を起こしてるんだ」
　将も彩子の仮説に、今まで何となく腑に落ちなかったことがクリアになった。赤井は彩子の話を聞いて、いっぺんに酔いが醒めてしまった。

「私の仮説が正しいかどうかは分からないけど、少なくともこれらの事件に関してはそう考えると、事件の真相が見えてきそうな気がするでしょう？」
「彩子ちゃん、間違いないよ。君の仮説は正しいぞ。警察は犯人逮捕で解決したと思ってるけど、この分だと動機が分からないといった事件が、今後も起きるぞ」
「しかし、この鵜匠を捕まえるのは難しいですね。今のところ彩ちゃん以外に、鵜匠のことに気づいている人すらいないでしょう？それに、事件には全く鵜匠の影が出てきてないですから」
「将君の言うとおりだな。普通の捜査では何も分からないだろうな。性別も年齢も国籍すらも」

　翌日から彩子が言った事件について、赤井は徹底的に関連性を調べたが、結局、鵜匠につながる手がかりは、髪の毛一本も見つけることが出来なかった。やはり彩子の仮説は単なる偶然に目を付けただけで、鵜匠というのは最初からいないのではないかと思った。

3―6

四月に入り、将と彩子は二年生に進級した。将と彩子が通っている高校では、相変わらず二人にラブレターをくれたり、直接交際を申し込んで来たりする同級生や先輩、後輩の生徒がいたが、二人とも適当な理由を付け、相手を傷つけないように断っていた。

ある日将は下校途中に、追いかけてきた他校の女生徒に呼び止められた。何事かと振り向くと、女生徒は一通の手紙を渡すと足早に去って行ってしまった。突然の出来事に、将は女生徒の人相も良く見ていない。

まるでテレビドラマのワンシーンのような状況に、将は一瞬、誰かに見られたのではないかと周りを見回したが、大丈夫だった。なぜかほっとした将は、もらった手紙をカバンに入れると、何事もなかったかのように歩き出した。手紙の内容の予想は付いていたが、それよりも、どうやって断るかが重荷だった。

帰宅した将は、女生徒からもらった手紙を開けてみた。案の定、ラブレターだ。封筒には手紙と一緒に、本人の写真も入っていた。ちょっと勝ち気な感じもするが、一緒に歩いたら人が羨むぐらいの可愛い娘だ。もし彩子がいなかったら、彼女と付き合うかもしれないと思った。将は手紙に書いてあった彼女の携帯メールへ返事を送った。

「今は大学受験に向けて勉強に専念したいので、せっかく誘ってもらったのに、すみません。大学に合格したら青春を楽しみたいと思います」

という、今まで断り続けたのと同じ内容を書いた。将が返事を送ってから五分も経たないうちに、彼女からメールが届いた。

「私の誘いを断ったのは中瀬さんが初めてです。きっと後悔しますよ」
後悔するとはどういう意味だろう？　意味深な返事だ。断ったことを後悔するのか、あるいは断ったことを後悔させられるのか。どちらにしろ何かしら嫌な予感がした。

それから一週間が過ぎた頃、先週メールで断った女生徒からメールが届いた。彼女の名前は大原風香、某私立高校の二年生だ。
「今度の土曜日に、一度だけでいいので会ってください。返事を待ってます」
先週のメールに書いてあった、きっと後悔しますよ。の文字が頭をよぎったが、その言葉が気になっていた将は行ってみることにした。

土曜日の午前十一時の約束だが、将は十分前に着いていた。待ち合わせ場所は、名古屋のオアシス21だ。ここは名古屋の中心部の栄にあり、ファッションやいろいろなグッズの店舗、回転寿司やファーストフードなどの飲食店が集まった商業施設だ。施設は水の宇宙船や緑の大地などがあり、イベントなども行われていて、楽しいひと時を過ごすことができる。

緑の大地のベンチに座って風香を待っている将の耳に、可愛らしい声が届いた。振返るとジーパン姿の風香が立っている。私服の彼女は、制服とは違った雰囲気だ。
スラリと伸びた足、キュッとあがったヒップは、彼女のためにジーパンがあるみたいに良く似合っていて、芸能人と見間違うほど魅力的に見える。身長は彩子と同じぐらいだ。肩にかかるサラサラの黒髪が似合っている。芸能人の仲間由紀恵に似ていて、少し薄化粧し

てきた顔は大人びて見える。

「お待たせ。時間は大丈夫ですか？　急に呼び出してごめんなさい」
「いや、いいよ。今日は五時までに帰ればいいから」
「用事があるんですか？」
「空手の道場に通ってるんだ。サボってもいいけど、館長がうるさいから」
「じゃあ強いんですね！　何段ですか？」
「白帯だよ。小さい頃身体が弱くて病弱だったから、健康のためにやってるだけなんだ。だからラジオ体操みたいなもんで、全然強くないよ。でもおかげで風邪を引かなくなったよ」
「あのぉ、腕組んでもいいですか？　イヤならいいんです」
「別に構わないけど」
「やった！」

風香は嬉しそうに腕を組んできた。将は悪い気はしなかったが、誰かに見られるのではないかとハラハラしていた。彩子に見られたら、それこそ絶交されるかもしれないと思うと、気がきではない。マクドナルドで昼食を済ませた二人は、デザートにアイスクリームを買って食べながら、あてもなく歩いた。

休日のオアシス21は若者で賑わっている。若いカップルが多く、その中でも将と風香は、ルックスとスタイルの面でも際立っている。すれ違うカップルの中には、将と風香に羨ましそうな視線を送るものもいた。

風香は将とのかりそめのデートを満喫していた。彼女には将を落とせる絶対の自信があった。今まで何人ものボーイフレンドと付き合ってきたが、すべて風香が一目惚れをして落としたのだ。

3―7

ウィンドウショッピングを楽しんだり、水の宇宙船や緑の大地の施設を、将と一緒に歩くだけで風香は楽しかった。一日だけの約束なので、将は風香が楽しいときを過ごせるように、彼女に対して気を遣っていた。風香の楽しそうな姿を見ていると、彩子と付き合っていなかったら、風香と付き合っていたかもしれないと思った。

楽しい時間は早く過ぎるものと相場が決まっている。気がつくと時計は三時半になっている。しきりに時計を気にしている将に気がついた風香が、核心に触れてきた。いつのまにか風香は友達言葉になっている。

「もう帰る時間よね。今日はありがとう。とっても楽しかったわ。将君、最後にひとつだけ聞いていい？」

「いいよ」

「これからも、私と付き合ってくれないかしら？」

風香は、将がノーと言えないほどの魅力的な笑顔で尋ねた。男心をくすぐる声と、少し斜め右から見えるルックスは、相手から見られる角度も計算しているように思えた。将が一瞬、付き合ってもいいかな？　と思えるほど、風香は可愛い。

「大原さん、ゴメン。メールにも書いたように、希望の大学に入りたいんで、今は受験勉強に集中したいんだ。僕の性格から言うと、彼女が出来ると勉強に集中できなくなると思うんだ。まして君のように可愛い女の子だと、尚更そうなりそうで。だから申し訳ないけど・・、ゴメン」

「毎日会う必要はないの。将君が会いたいときだけでいいの。決して勉強の邪魔になるようなことはしないわ」

風香は、将が必ずＯＫの返事をする自信があった。今まで自分に言い寄られて断った男は一人もいない。風香は自分の魅力を充分理解していたし、それは唯一無二の風香のプライドでもあった。

「気持ちはありがたいんだけど・・」

「私のことが嫌いなの？　将君の好みじゃないの？　それとも、付き合ってる人がいるの？」

「違う違う。そんなことないよ。君みたいに可愛くて魅力的な女の子が自分の彼女だったら、すごく嬉しいよ。でも僕は意志が弱いから、さっき言ったように、すぐに君にのめり込んでしまって勉強どころじゃなくなると思うんだ。だから・・」

「じゃあ、大学に合格したら付き合ってくれるのね？　あと二年間待っていればいいのね？」

「正直なところ約束はできない。その時は、君も僕も気持ちが変わってるかもしれないし、何があるか分からないから」

「結局、私とは付き合えないということね！」

今まで彼女は、自分の誇り高きプライドを崩してまで交際を頼んだことはない。いつも男が言い寄ってきていた。彼女が好きになり、交際を申し込んだ相手で断ったものは一人もいなかった。

「分かったわ！　じゃあ、もう二度と会わない」

風香の言葉には怒りの感情が込められていた。彼女の誇り高きプライドはズタズタだった。風香は将を許せなかった。絶対に、絶対に許せなかった。

楽しい時間のまま風香と別れるつもりでいた将は、最後の最後で風香の機嫌を損ねてしまった自分が、何かとんでもないことをしたような気になっていた。ふと将の頭の中を、きっと後悔することになりますよ。と言った風香の言葉がよぎった。

3―8

風香と気まずい別れかたをしてから約一ヶ月が過ぎた頃、弁当を食べ終わり、クラスの友達と雑談をしている将の携帯に番号非通知の着信が入った。

「もしもし、中瀬です」

「中瀬将さんですね？　私、あなたと大原風香さんがデートしている写真を持ってるんですけど、あなたの彼女に渡してもいいですか？」

「どなたですか？　一体、何を言ってるんですか？」

「だから、あなたがデートしている写真を、あなたの彼女に渡していいかと、聞いてるんです」

「目的は何ですか？」

「今日の午後六時に、荒越公園に来てください。そうすれば分かります」

一方的に言うだけ言って電話を切った相手に腹が立ったが、将は荒越公園に行ってみることにした。

約束の十分前に着いた将は、公園の椅子に座って電話の主を待った。荒越公園はテニスコートが二面ある小さな公園だ。この時間にテニスをやっている人はいなく、公園内にも人影はない。

六時を五分ほど過ぎたとき、植え込みの木の中から五人の若い男が現れた。年の頃は二十歳過ぎに見える。将は彼らと視線を合わせないように、彼らと反対方向へ身体を向けた。

男たちは雑談しながら、将のほうへやって来た。将が立ち上がりテニスコートのほうへと歩き出すと、男たちは少し足早になり将を取り囲んだ。将が男たちの輪の中から出ようとすると、男たちが前に立ちはだかり行く手を遮った。

「すみません。僕、友達と待ち合わせをしてるので、通してもらえませんか？」
「兄ちゃん、お前の待ち合わせの相手は俺たちだ」
「違います。僕が待ち合わせしているのは女子高生で、あなた方じゃありません。人違いじゃないですか？」

「兄ちゃん、お前の名前は中瀬将って言うんだろう？　もしそうだったら、俺たちがお前の待ち合わせ相手だ」
「でも電話を掛けてきたのは女子高生です」
「お前はアホか！　掛けてきたのは女子高生かも知れないけどな、待っているのはその女子高生かどうか分からないだろ。俺たちなんだよ」

「分かりました。それで、僕を呼び出した理由は何ですか？」
「理由は自分の胸に手を当てて考えたら分かると思うけどな、少しお前に反省してもらおうと思ってるんだ」
「すみません、何のことか分からないんです。やっぱり、人違いじゃないんですか？」
　正直なところ、将は何のことか分からない。心当たりはまったくなく、見知らぬ男たちに言いがかりを付けられる覚えもない。

「分からないんだったら教えてやる。お前、ある可愛い女子高生の気持ちを踏みにじっただろ。その彼女がどんなに傷ついたか知ってるのか？」
「大原風香さんのことですか？　あなたがたは彼女の知り合いなんですか？」
「知らないよ。彼女とは一度も会ったことないし、顔も知らないけどな、彼女が傷ついて泣いているというのを聞いて、お前に罰を与えようと思って呼び出したんだ」

将は男の言ってることが理解できない。一体誰に彼女の気持ちを聞いたと言うんだ。会ったこともないのに、何故こんなことをするんだ。将はテレパシーで男たちの考えを読んでみたが、彼らの言ってることは間違いない。ただし、風香が彼らに、将に罰を与えるように頼んだということはなかった。なぜなら、男たちの意識の中に風香はいなかったし、風香以外の誰かが頼んだということもなかった。

今はっきり言えることは、男たちが将に対して暴力を振るおうとしていることだが、男たちの意識の中に将を襲う動機がないのだ。動機がないのに襲おうとすること事体が有り得ない。まるで彼ら全員が、何かに操られているかのように動機のないまま将を襲おうとしているのだ。

「兄ちゃん、お前に恨みはないけど、乙女心を踏みにじった罰を受けてくれ。殺すつもりはないけど、少し入院することになるのは覚悟してくれ」

言い終わると同時に、男たちが一斉に将に殴りかかってきた。彼らの目には、泣き叫ぶ将の姿が見えるはずだったが、彼らの目に映ったものは信じられない光景だった。

男たちが将に殴りかかった瞬間、将は彼らの輪の外に出ていた。テレポートしたのだ。男たちは、将がどうやって輪の外に出たのか分からなかった。輪の外で空手の攻撃のポーズを取った将は、さっきまでとは別人に見えるほど、圧倒的な威圧感を放っている。その迫力に、男たちは殴りかかるどころか、後ずさりするものもいるほどだ。それほどの強力なオーラだ。

「たかが高校生のガキに、お前ら何をびびってるんだ！　やっちまえ！」

リーダーとおぼしき男の声に、全員が一斉に殴りかかってきたが、将の目にはスローモーションのように見える。左右の回し蹴りと後ろ回し蹴りが、途切れることなく繰り出された。それは傍から見ていると、踊りを踊っているような綺麗な動きだが、踊りと違っていたのは、常識を超えた桁違いの速さだった。

おそらく五人の男たちには、将の蹴りはまったく見えていなかったはずだ。その速さは、プロの格闘家でも避けきれるものではない。彼らが倒れるのに十秒もかからなかった。手加減をした蹴りだったが、それでも一、二週間は痛むだろう。将は彼らに近づくと話しかけた。

「誰に頼まれたんですか？」

「分からないんです。ただ、あなたを襲わないといけないような気になって、自分を抑えられなかったんです」

さっきまで威勢の良かったリーダーは、桁違いの強さの将に、自然と敬語になっている。それは将を自分より上だと認めた証拠だ。

「俺も同じです」

「俺も」

「俺も」

リーダーの言葉に同調するように、他の四人も同じだと答えた。将は全員の意識を覗いてみたが、ウソは言ってない。電話で呼び出した女子高生と思える声の主も、彼らの意識にはない。不可解なことだらけだ。彼らの意識の中に、将を襲わせた犯人の手がかりとなるものは何もなかった。まるで完全犯罪だ。苦痛に顔をゆがめている男たちを残して、将は公園を後にした。

3―9

将は風香とのデートのこと、公園に呼び出されたこと、そしてそこでの男たちとの不可解な出来事の一部始終を彩子に話すことにした。話すというより相談だ。自分ひとりの力では、今回の謎は解けないと思ったからだ。ある日の土曜日、将は彩子の家を訪ねた。

「相談したいことって何？　心配事でもあるの？」
彩子が心配そうな顔をして尋ねた。

「彩ちゃん、正直に言うから怒らないでね」
将の言葉に、わざとらしくプッと膨れた顔になった彩子は、その表情さえも可愛い。将は彩子以外の女性とは、何があっても二人だけで会わないようにしようと心に誓った。

「実は一ヶ月ほど前に、ある私立高校の大原風香という女生徒と二人で、オアシス21に行ったんだ」
「だから怒らないでって言ったのね！　怒らないわよ。正直に話してくれるんだったら。でも内容しだいよ」

「おいおい、全部正直に言うけど、まったく何もやましいことはしてないからね。それだけは信じてくれよ」
言いながら将は、何だか自分たちが夫婦で、自分の浮気が見つかって弁解しているような感じに思えた。その感じも何となく嬉しい。

「彼女と行くことになった理由は・・・」
将は下校途中で手紙をもらったこと、メールで交際を断ったが、一度だけ会って欲しいと言われ、会ったことを話した。気まずい感

じになって別れたことや、その後公園に呼び出されたことなども、包み隠さず全て話した。

「分かったわ。怒らないわよ。マサルくんに最初から彼女と付き合う気がないことが分かったから」

言いながら彩子が抱きついてきた。しっかりと将を抱きしめると、耳元で囁いた。将はドキドキしながら、両手を彩子の背中に回した。

「ありがとうマサルくん、正直に言ってくれて嬉しいわ」

コンコン。ドアをノックする音が聞こえた。何事もなかったかのように離れた彩子が言った。

「なあに？」

「オヤツ持ってきたけど邪魔だったかしら」

「邪魔に決まってるじゃない」

彩子はそう言いながらも、ドアを開けてオヤツを受け取った。恵子はオヤツを渡すと、そのまま下りていった。オヤツは将の大好物のモンブランと、ミルクティーだ。二人はオヤツを食べながら話を続けた。

「なるほどねぇ。う～ん、何か引っかかるわね」

彩子はモンブランとミルクティーを口に運びながら、必死で考えている。モンブランを食べ終わり、ミルクティーを飲み干すと彩子が言った。

「ご馳走様でした。マサルくん、分かったわよ！」

とっくに食べ終わっていた将は、彩子が食べ終わるのを待っていた。開口一番、彩子の言葉に驚いた将が尋ねた。

「本当に？　一体どういうこと？」

「マサルくん、鵜匠の話しのこと覚えてる？」
「彩ちゃんの仮説の黒幕のことだよね。そいつがいろいろな事件の真犯人で、鵜匠が捕まらないことには、また事件が起きるって言ってたよね？」
「そうよ。結果論だけど、マサルくんが大原さんと会ったことは正解だったわ。彼女と会ったことで、鵜匠の手がかりが掴めるかもしれないわ」

思いがけない言葉に、将は霧が晴れていくような気分になった。赤井が必死で調査して何も分からなかった鵜匠の手がかりが、彩子によって明らかになりそうだからだ。

「鵜匠を見つけるには、鵜の首に繋いである紐を手繰っていけばいいんだけど、今までの事件では紐が見つからなかったから、鵜匠にたどり着くことが出来なかったの。でも大原さんとマサルくんが会ったことで、紐が見つかりそうなの」
「凄い！　さすが彩ちゃんだ。どうやったら見つかるのか教えてよ」
「えへん！　教えてあげるから、オアシス２１でデートしてくれる？」

彩子はからかうように横目で将を見ながら言った。彩子とは毎日会っている将だが、その表情は、ドキッとするぐらい愛くるしく可愛い。
「もちろんＯＫ。マクドナルドも奢るよ。これからは、彩ちゃん以外の女の子とは一緒に行かないようにする」
「よろしい。じゃあ、教えてあげるわ。今までの事件で不思議だったのは、犯人に犯罪の動機がなかったことだけど、私は動機はあっ

たと思うの。ただその動機は、犯人の意識の中にはなくて、外から与えられていたと思うの。要するに誰かに操られていたのよ。だからマサルくんがいくら犯人の意識を調べても見つからなかったし、犯人自体、自分の動機じゃないから記憶になかったのよ」
「まるで、ロボットをリモコンで動かしてるようなものだね」
「そうよ。でも疑問があるでしょう？」

「二つあるよ。ひとつは、どうやって鵜匠に連絡をするのか？　二つ目は、鵜匠はどうやって犯人を操るのか？」
「その二つの疑問が分かれば鵜匠を捕まえられるんだけど、やっとその方法が分かったわ」
　彩子は自信に満ちた表情で、力強く言い切った。

「マサルくん、大原さんの意識に入ることは出来る？」
「彼女の意識に入ったことがないからシグナルは分からないけど、どこの高校かは分かってるから、探して入ることは出来るよ」
「彼女の意識に入ったら、たぶん彼女が鵜匠と連絡を取ってるはずだから、探して欲しいの」
「なあんだ。大原さんの意識を探ればすぐに解決するのか」
「そんなに簡単じゃないわよ。彼女は鵜匠と会っていないし、鵜匠がいることすら知らないと思うわ」

「じゃあ、俺は彼女の意識に入って、何を調べたらいいの？」
「私が思うには、彼女はインターネットの闇サイトかどこかにアクセスして、マサルくんへの仕返しを依頼したと思うの」
「分かった。そのサイトで依頼を受けるのが鵜匠で、彼は何らかの方法で鵜を見つけて、操るための紐を付けるということだよね？」
「そうよ。紐を付けられた鵜は、彼の意のままになるってわけよ。そして、大原さんの依頼どおりのことをやった鵜は、やったという事実は覚えているけど、動機が分からないのよ。自分の意思でやる

んじゃなくて操られているんだから、いくら考えても分かるわけはないわ」

以前彩子は、テレビで注意を促していた闇サイトによる犯罪のことが記憶の片隅に残っていて、将の話を聞いたときに、今回の不思議な事件の解決策を思いついたのだ。

「じゃあ、来週早々に大原さんを見つけて、意識を探ってみるよ。どこの闇サイトにアクセスしたかを調べればいいんだね？」
「お願いね。思うんだけど、鵜匠には何か特別な力があるわね」
「俺みたいな超能力？」
「マサルくんほどじゃないかも知れないけど、人を操るんだからテレパシーみたいなものじゃないかしら」
「鵜匠を見つけたら、俺と鵜匠との一騎打ちになるな」

彩子は超能力者同士の戦いはどんなものなのか、想像もつかなかったが、殴り合いの喧嘩と違って想像もつかないだけに、不安が膨らむのを抑えることは出来なかった。

「彩ちゃん、このことは赤井さんにも話したほうがいいと思うんだけど」
「私もそう思ってたの。犯人を逮捕するのは、あくまで警察の仕事だからね」
「今から赤井さんにテレパシーで連絡するよ」
将は静かに目を閉じると、赤井にテレパシーを送った。五秒ほどで目を開けた将は、にこりとしてピースサインを出した。わずか五秒で全ての情報が赤井に伝わったのだ。

「彩ちゃん、俺、今日はこれで帰るよ」
「来週の日曜日はオアシス２１でデートよ。忘れないでね」

「了解しました！」
立ち上がって敬礼した将の右頬に、彩子はマシュマロのような軟らかい唇を、軽く押し当てた。

3―10

翌週の月曜日、昼食を食べ終わった将は机に腕を置いて頭を乗せ、昼寝をしているフリをして幽体離脱をした。一分弱で離脱した意識体の将は、風香のいる高校へと瞬時に移動すると、彼女を発見した。意識体の将は彼女の意識に潜り込むとすぐに抜け出し、自分の肉体に戻った。離脱してから十秒しか経っていない。風香のシグナルを覚えた将は、今晩、彼女の意識を探ってみることにした。一刻も早く鵜匠を見つけないと、次の犯罪が起きるからだ。

夕方六時に夕食を済ませた将は、ベッドに横になると幽体離脱した。離脱したあとの肉体は、傍から見る限りでは、目を閉じて眠っているようにしか見えない。意識体の将は、覚えている風香のシグナルを瞬時に見つけた。

彼女の意識に潜り込んだ意識体の将は、彼女がアクセスしたインターネットのサイトを見つけた。サイト名は、サイレント・パニッシャー。彼女の依頼は、将を少し痛めつけて欲しい。殺しはダメ。という内容だ。

サイレント・パニッシャーは、依頼者の要求を必ず実行すると謳っていた。ということは、将はまた狙われるということだ。風香は依頼に対する費用として、十万円を払っていた。

意識体の将は、なぜそこまで風香が自分を憎んでいるのかを探った。理由はすぐに分かった。それは彼女の唯一無二と言えるプライドが、将によってズタズタに傷つけられたからだ。

彼女にとってそのプライドは、自分の存在理由そのものなのだ。それが将によってズタズタにされたのだ。可愛さ余って憎さ百倍というコトワザのとおり、風香はプライドを傷つけられたことによって、将に持っていた恋心の百倍もの憎しみを持ってしまったのだ。

意識体の将は、良かれと思って一日だけのデートをした自分を、偽善者だと思った。彼女の気持ちを軽々しく考えた自分を、情けなく思った。お前は一体、何様のつもりだ！　自分を襲った犯人は風香ではなく、自分自身なのだ。

意識体の将は肉体に戻ると気持ちを切り替え、サイレント・パニッシャーにアクセスしてみた。そのホームページは極めてシンプルに作られていて、受付は電話のみとなっている。

将は調べたことを、テレパシーで彩子に伝えた。

「膳は急げよね。今から電話してみるわ」

「ちょっと待って。俺が彩ちゃんの意識に潜り込んでからにしてね」

将は彩子の部屋へテレポートすると、ベッドに横になり幽体離脱した。意識体の将は、彩子の意識に潜り込んだ。

「彩ちゃん、電話していいよ」

「しっかり私を守ってね。くれぐれも鵜匠に気づかれないようにね」

彩子は、サイレント・パニッシャーのホームページに載っている電話番号をダイヤルして、応答を待った。受付時間は、午前十時から午後七時までとなっている。五回の呼び出し音のあと、電話はつながった。

「はい、お電話ありがとうございます。サイレント・パニッシャーです」

電話の相手は若い女性の声だ。その女性は、決まり文句であると思われる言葉を続けた。

「当サイトは信用第一でやっております。今から当サイトの説明を致しますので、信用できないと思われたら電話をお切りください」

彩子はそのまま女性の説明を聞いた。

「当サイトでは、あなたのご依頼を必ず実行することをお約束します。ただし、依頼内容に制限があります。当サイトで出来ることは、人間関係に関することだけです。誰かに御仕置きをしたいけど自分

では出来ない、といったことなどを、あなたに代わって実行します。料金は依頼内容によって変わります。依頼するにしても、あなたの個人情報を細かく言う必要はありません。匿名でＯＫです。料金は後払いです。あなたの依頼が成功したあと、払っていただきます。今の説明で納得していただいたら、担当の者と代わりますので、依頼内容をお話しください。信用できないと思われたら、電話をお切りください。ではどうぞ」

説明は、録音されているテープを流している。意識体の将は、彩子が説明を聞いているときに、彼女の意識に潜り込んできた意識を捕らえていた。それは、意識体ではなくテレパシーだ。将よりも能力的にレベルが低い。そのために、彩子の意識に同化することで自分の存在を隠していた意識体の将に、相手は気づかなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1386x/

その少年はマサル

2011年10月26日08時18分発行